長岡京市文化財調査報告書

－ 勝龍寺城跡 外郭土塁・空堀の調査 －

第 73 冊

２０１９

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編 集　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

－ 勝龍寺城跡 外郭土塁・空堀の調査 －

第 73 冊

２０１９

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編 集　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

（1）南北土塁遠景（南から）

（2）南北土塁遠景（南西から）

（1）東西土塁を開削する溝と土塁の南側で終息する堀（南東から）

（2）東西土塁の断ち割り（南から）

（1）南北土塁東斜面の掘り込み（東から）

（2）南北土塁北崖面（北から）

南北土塁東斜面の掘り込みと空堀（南東から）

（1）東西空堀の南壁面と土塁（北西から）

（2）東西空堀の東壁面（西から）

（1）遊歩道が整備された東西土塁と土橋（西から）

（2）南北土塁北崖面に復元された土層（北西から）

序　　文

私たちの長岡京市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかっており、特に784年に「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として、全国的に知られています。

また、市内には史跡乙訓古墳群を構成する首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が存在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。

さて、本報告書は平成11年度から平成14年度及び平成25年度、平成26年度に長岡京市教育委員会が実施した神足城跡、中世勝龍寺城跡等の発掘調査と立会調査の成果をまとめたものです。

勝龍寺城は元亀2年(1571)に織田信長の指示により細川藤孝が大規模な改修を行い、乙訓・西岡地域を支配する拠点としたことで有名ですが、今回の一連の調査では勝龍寺城北東部の土塁や堀などの整備状況とともに、大規模改修以前に存在した神足城に関わる堀の存在が明らかになるなどの貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成31年3月

長岡京市教育委員会

教育長　　山　本　和　紀

凡　　例

1．本書は、長岡京市教育委員会が公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した勝龍寺城跡外郭土塁・空堀の発掘調査に関する報告である。

2．調査対象地は、第１～３図および付表－１に表示した。

3．調査は長岡京跡の調査次数を付して実施しており、次数は右京域の通算調査回数である。調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977 年）収録の旧大字小字名と同地区内における調査回数を示す。

4．条坊復原案は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第４号（1992 年）に従った。

5．本書の地形区分は、「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991 年）によった。

6．本文（注）に示した報告書のうち、使用頻度の高いものは、『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（十）公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター（2018 年）に従って略記した。

7．本書で使用している方位と座標値は世界測地系による。平面直角座標系の第Ⅵ系。

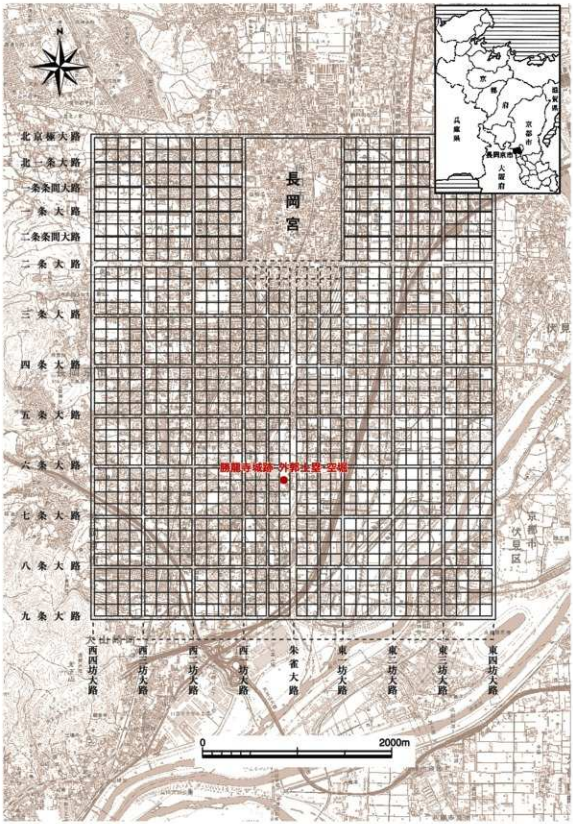
8．挿図土層名で〈 〉に表示した記号は、『新版標準土色帳』（1997 年版）の JIS 表記である。

9．遺物写真は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

10．本書は、第１章を原　秀樹、あとがきを山下　研（長岡京市教育委員会）が執筆し、第２章については福島克彦氏（大山崎町歴史資料館）より玉稿を賜った。全体の編集は技術補佐員・整理員の協力のもと原が行った。

付表－１　本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	面積	調査担当	備考
長岡京跡 右京第 631 次	7AN MKI-6	長岡京市東神足 二丁目７	1999 年２月１日 ～ 1999 年３月 12 日	84㎡	原　秀樹	『長岡京市報告書』第 39 冊　1999 年 『長岡京市報告書』第 41 冊　2000 年
長岡京跡 右京第 681 次	7AN MKI-7	長岡京市東神足 二丁目７	2000 年９月４日 ～ 2000 年 10 月 31 日	88㎡	原　秀樹	『長岡京市報告書』第 42 冊　2001 年
長岡京跡 右京第 733 次	7AN MKI-8	長岡京市東神足 二丁目 10－１	2002 年２月 12 日 ～ 2002 年２月 22 日	27㎡	木村泰彦	『長岡京市報告書』第 43 冊　2002 年 『長岡京市報告書』第 45 冊　2003 年
長岡京跡 右京第 1060 次	7AN MKI-9	長岡京市東神足 二丁目地内	2013 年６月 17 日 ～ 2013 年８月 13 日	48㎡	山本輝雄 岩崎　誠	『長岡京市報告書』第 66 冊　2014 年
長岡京跡 右京第 1084 次	7AN MKI-10	長岡京市東神足 二丁目地内	2014 年６月 23 日 ～ 2014 年８月 15 日	59㎡	原　秀樹	『長岡京市報告書』第 68 冊　2015 年
長岡京跡 立会 第 02007 次	－	長岡京市東神足 二丁目	2002 年３月	－	－	『長岡京市センター年報』平成 14 年度　2002 年
長岡京跡 立会 第 14124 次	－	長岡京市東神足 二丁目	2014 年９～ 10 月	－	－	『長岡京市センター年報』平成 26 年度　2014 年



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本 文 目 次

第１章　勝龍寺城跡　外郭土塁・空堀の調査
— 長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡 —
1　はじめに …… 1
2　調査経過 …… 2
3　検出遺構 …… 4
4　出土遺物 …… 17
5　小　　結 …… 28

第２章　勝龍寺城研究の再検討
はじめに …… 32
1　神足城跡の位置 …… 32
2　外郭線の築造 …… 35
3　勝龍寺城主要部 …… 39
おわりに …… 41

あとがき …… 42

巻 頭 図 版

巻頭図版１　（１）南北土塁遠景（南から）
（２）南北土塁遠景（南西から）
巻頭図版２　（１）東西土塁を開削する溝と土塁の南側で終息する堀（南東から）
（２）東西土塁の断ち割り（南から）
巻頭図版３　（１）南北土塁東斜面の掘り込み（東から）
（２）南北土塁北崖面（北から）
巻頭図版４　南北土塁東斜面の掘り込みと空堀（南東から）
巻頭図版５　（１）東西空堀の南壁面と土塁（北西から）
（２）東西空堀の東壁面（西から）
巻頭図版６　（１）遊歩道が整備された東西土塁と土橋（西から）
（２）南北土塁北崖面に復元された土層（北西から）

図 版 目 次

図版 1 （1）恵解山古墳と勝竜寺城公園・神足神社遠景（北東から）
（2）勝竜寺城公園と外郭土塁が残る木立（南から）（平成 10 年撮影）
図版 2 （1）東西土塁と南北に延びる堀 SD01（南東から）
（2）東西空堀の掘削状況（北東から）
（3）東西空堀の掘削状況（北西から）
図版 3 （1）東西土塁の断ち割りと調査地遠景（南東から）
（2）東西土塁南側に堆積する石礫（南東から）
図版 4 （1）東西土塁南側の下層遺構（西から）
（2）室町時代の井戸 SE05（西から）
図版 5 （1）南北土塁西側の北トレンチ(南西から）
（2）南北土塁西側の南トレンチ(南西から）
（3）南北土塁に平行する溝 SD01 断面（北から）
図版 6 （1）東西空堀と南北土塁（東から）
（2）土橋と東西空堀の堆積層（南から）
図版 7 （1）東西空堀の横断面（北西から）
（2）東西土塁の西向き斜面（西から）
図版 8 （1）東西土塁南側の平坦地（南西から）
（2）東西土塁に平行する溝 SD04 を覆う砂礫（北西から）
図版 9 東西土塁に平行する溝 SD03（南から）
図版 10 （1）伐採後の東西土塁と南北土塁(東から）
（2）整備工事中の土塁崖面（南東から）
図版 11 出土遺物　土師器
図版 12 出土遺物　土師器・瓦器・土製品・金属製品
図版 13 出土遺物　瓦器・国産陶磁器・白磁

挿 図 目 次

第 1 図　長岡京と調査地の位置（1/40000） …… iii

勝龍寺城跡　外郭土塁・空堀の調査

第 2 図　発掘調査地位置図（1/5000） …… 1
第 3 図　調査地全体図・東西土塁縦断面図（1/300） …… 3
第 4 図　R1060–西調査区検出遺構図・土層図（1/100） …… 4
第 5 図　R1084–1トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 5
第 6 図　竹林に覆われた土橋（北から） …… 5
第 7 図　R1060–中央調査区検出遺構図・土層図（1/100） …… 6
第 8 図　R1060–東調査区検出遺構図・土層図（1/100） …… 7
第 9 図　R1084–2トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 8
第10図　R1084–3トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 9
第11図　R1084–3トレンチ空堀に流入する土砂（南西から） …… 9
第12図　R1060–北東区画西辺南北土塁北崖面土層図（1/100） …… 10
第13図　R733–検出遺構図・土層図（1/100） …… 11
第14図　R1084–4トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 12
第15図　R1084–5トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 12
第16図　R681–2トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 13
第17図　R681–2トレンチ東壁（西から） …… 13
第18図　R631・681–1トレンチ検出遺構図・土層図（1/100） …… 14
第19図　R681–1トレンチ壁面土層図（1/100） …… 15
第20図　勝龍寺城土塁立会断面図（1/100） …… 16
第21図　R631–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4） …… 17
第22図　R681–遺物実測図と縦軸口径分布図–1（1/4） …… 18
第23図　R681–遺物実測図と縦軸口径分布図–2（1/4） …… 19
第24図　R1084–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4） …… 20
第25図　R1060–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4） …… 21
第26図　R631–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4） …… 21
第27図　R733–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4） …… 22
第28図　土師器実測図（1/4） …… 23
第29図　瓦器実測図–1（1/4） …… 23

第 30 図　瓦器実測図－2（1/4）…… 24
第 31 図　陶磁器実測図（1/4）…… 25
第 32 図　須恵器実測図（1/4）…… 26
第 33 図　弥生土器実測図（1/4）…… 26
第 34 図　瓦実測図（1/4）…… 26
第 35 図　石製品・金属製品実測図（1/4・1/2）…… 27
第 36 図　木製品実測図（1/8・1/4）…… 28
第 37 図　勝龍寺城と戦国期の土師器皿 …… 29
第 38 図　R300－遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）…… 30
第 39 図　恵解山古墳－遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）…… 31
第 40 図　大正 11 年の都市計画基本図と乙訓郡条里坪付図解読図（部分）(1/6000) …… 33
第 41 図　勝龍寺近隣指図（「九条家文書」）正方形区画が神足城（「長岡京市史」資料編（二）より）…… 34
第 42 図　勝龍寺城跡周辺地籍図（大山崎町歴史資料館　企画展示図録「京都の城、乙訓の城」(1998)）より …… 36
第 43 図　R339－上層検出遺構図（1/400）…… 37
第 44 図　神足村微細絵図（部分　左が北）…… 38
第 45 図　勝龍寺城の縄張り想定復原図（1/5000）…… 40

付 表 目 次

付表－1　本書報告調査地一覧表 …… ii
付表－2　報告書抄録 …… 43

第１章　勝龍寺城跡　外郭土塁・空堀の調査

― 長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡 ―

１　はじめに

1　本報告は、平成 11 年 (1999) から平成 14 年 (2002) 及び平成 25 年 (2013) と平成 26 (2014) の間、長岡京市東神足二丁目地内において実施した長岡京跡、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡の通算５年次にわたる発掘調査の総括である。各調査年度の一覧は付表－１のとおりである。

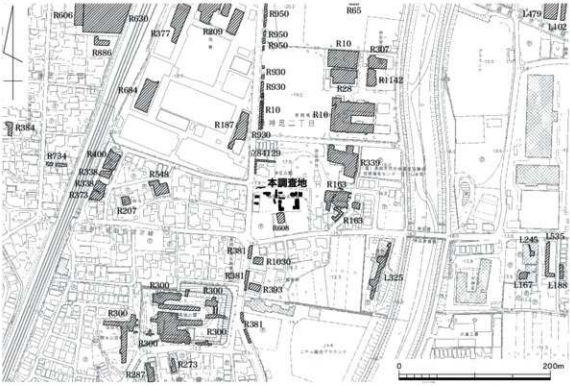
2　本調査は、現存する勝龍寺城跡の外郭土塁と空堀の資料を得ることを目的に最初３年次を遺跡範囲確認調査として、後年の２年次は神足公園の整備事業に伴う勝龍寺城跡の残存遺構の活用を目的に実施したものである。

3　調査地は、長岡京跡右京七条一坊二町の推定地で、旧石器～鎌倉時代の神足遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。

4　発掘調査は、各年度ごとの国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。

5　発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、神足神社、神足自治会など地元の方々には種々のご協力を得た。

6　本書の執筆および編集は原が行った。



第２図　発掘調査地位置図 (1/5000)

2　調査経過

調査対象地である勝龍寺城跡の外郭土塁と空堀は、ＪＲ長岡京駅の南約 400 mに位置する。神足神社の参道西側に東西 65 mにわたって残されており、平成 27 年には土塁上に遊歩道を設けた「神足公園」として整備された。以前は鬱蒼とした竹藪に覆われていたが、現在は土塁上から周囲を見渡すことができるようになった。勝龍寺城跡の本丸と沼田丸は当地の南西約 100 mにあり、発掘調査後の平成４年に公園整備されて「勝竜寺城公園」として地域の憩いの場となっている。

勝龍寺城跡の発掘調査では、枡形虎口の城門、瓦葺きの礎石建物、高石垣の構築などの先駆的な築城方法を採用した織豊系城郭の中で織田政権下末期に改修された城であり、現存する土塁と空堀、北側の惣構の堀跡についても江戸時代の絵図や、地形図などに描かれた痕跡があり、これらの形状から、細川藤孝が元亀２（1571）年に城を大改修した往時の姿をとどめるものと評価されている。

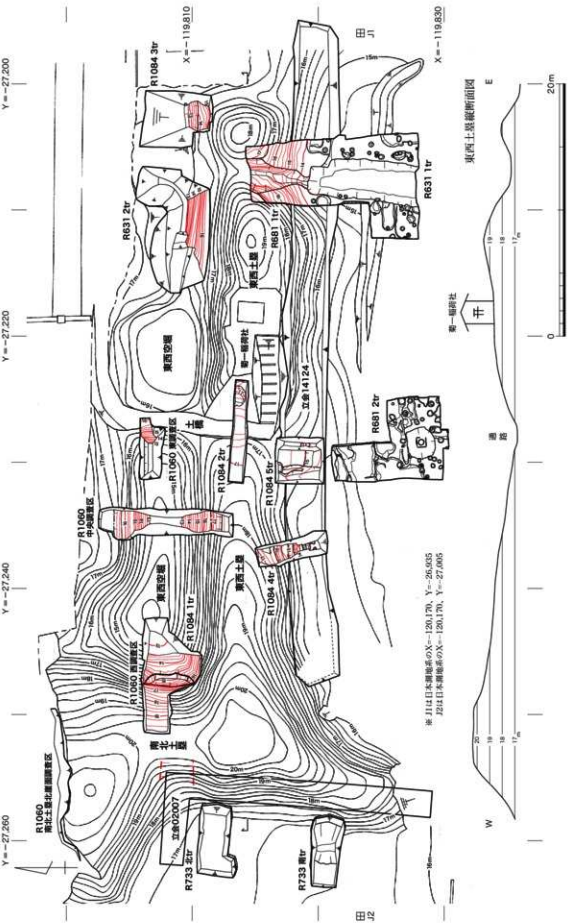
一方、神足神社参道脇に残る土塁と空堀の調査では、現存する土塁の下から埋め戻された土塁跡が発見され、細川藤孝が元亀２（1571）年に改修した勝龍寺城に取り込まれた神足城跡の堀跡ではないかと注目されたことは特筆される。

地形分類図によると、当地は小畑川右岸の低位段丘Ⅰ面にあり、北から南へ緩やかに傾斜する。地形の変換点は外郭土塁付近で低位段丘Ⅱ面と重なり、さらに南へ一段低くなる。城の中心部は、北側より低くその周囲は小畑川と犬川に囲まれた排水不良の後背低地となっている。昭和の町村時代まで城の南側を占める勝竜寺村は台風等による浸水被害に見舞われており、戦国時代も風雨による浸水等は避けられなかったであろう。しかし、それ以上に当地の立地は陸路が西国街道と久我畷、伏見方面に通じる幹線道路に接しており、水路は巨椋池を介した舟運が利用できることは、戦国時代を通じて戦略上の重要な拠点であったことがわかる。

周辺の発掘調査では、縄文時代から中近世にわたる各時代の遺構と遺物が多数発見されている。弥生時代中期の拠点的集落である神足遺跡は、低位段丘Ⅱ面まで方形周溝墓が造営された墓域となっている。長岡京期は、七条条間小路と隣接する宅地から建物や井戸が発見されている。勝龍寺は、寺伝によると平安時代前期の創建と伝わる。発掘調査では、平安時代中期の地鎮跡、丹波系軒平瓦と掘立柱建物が発見されており、勝龍寺に関連する施設と想定されている。

神足神社の参道東側の土塁と空堀については、昭和 59 年に開発計画が明らかとなり、有識者による勝龍寺城外郭部の歴史的意義や保存・活用について要望が出された。こうした中、京都考古学研究会によって行われた土塁と空堀の地形測量図が公表されている。開発に伴う発掘調査は、昭和 59 年に右京第 163 次調査として実施された。

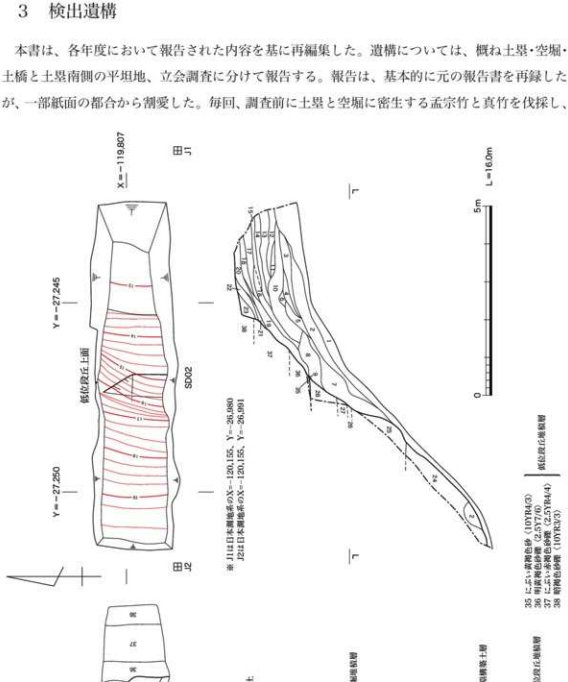
本書掲載の神足神社参道の西側に残る土塁と空堀の発掘調査は、これまで５年次にわたる国庫補助事業として実施された。当初の３年間は、室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡の資料を得ることを主な目的とした遺跡範囲確認調査で、その後の２年間は、神足公園整備に伴い、残存する遺構を活かして整備する目的で実施された（付表−２）。



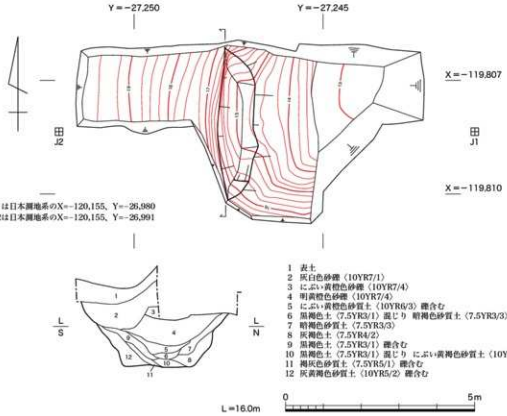
第３図　調査地全体図・東西土塁縦断面図（1/300）

3　検出遺構

本書は、各年度において報告された内容を基に再編集した。遺構については、概ね土塁・空堀・土橋と土塁南側の平坦地、立会調査に分けて報告する。報告は、基本的に元の報告書を再録したが、一部紙面の都合から割愛した。毎回、調査前に土塁と空堀に密生する孟宗竹と真竹を伐採し、



第４図　R1060−西調査区検出遺構図・土層図（1/100）



第５図　R1084−１トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）

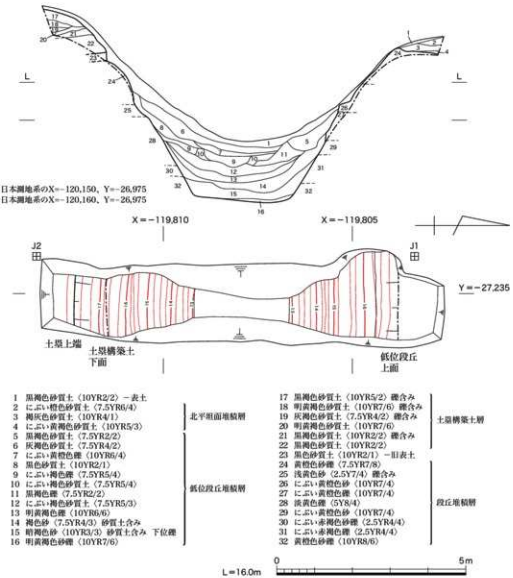
搬出するために長さを切り揃える清掃作業から始まり、地形測量と各トレンチ調査を進めて、終了後に埋め戻し作業を行っていた。

南北土塁から発見した掘り込み（第４図）　南北土塁は、土塁構築層の段丘礫層上面から高さ約 3.5 m の盛土で構築されている。東西空堀の底と南北土塁頂部の比高は約 6.5 m、斜面傾斜角は 45 度である。土塁は右京第 1060 次北崖面調査区（第 12 図）で最も高くなっている。

南北土塁構築土は、現状土塁の下から発見された掘り込みの埋め土と考えられる下層と、その上に厚く盛られた上層に分かれる。下層は、礫の少ない砂質土（第４図西壁第 26 ～ 29 層）からなる。この下層のあり方から、掘り込みは一気に埋め戻されたと考えられる。上層は、土質や土色の特徴から、段丘礫層を掘削して厚く盛られたものと推察され、南北土塁北崖面の土塁構築土上層の礫層と酷似している。

第６図　竹林に覆われた土橋（北から）

掘り込みは、右京第 1060 次調査で検出された南北土塁構築以前に段丘礫層を掘り下げたものである。深さ約２m。逆台形を呈する形状のおよそ北半分を検出し、立会 02007 次調査で検出した溝と繋がる南北土塁構築以



第７図　R1060−中央調査区検出遺構図・土層図（1/100）

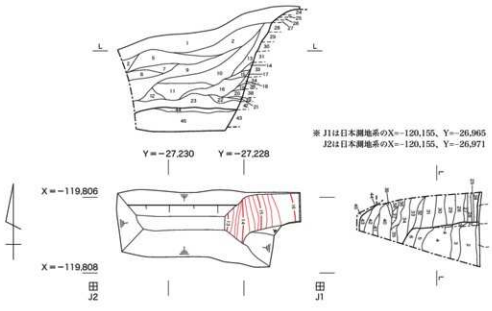
前の東西方向の堀と考えられる。

空堀は、南北土塁構築時に堀り込みをさらに掘り下げたと考えられる。底面の標高は 12.9 m。

南北土塁の掘り込みの規模（第５図）　右京第 1060 次の調査を受けて、掘り込みの全容を確認するため空堀底から土塁壁面を埋め戻した土嚢を取り除き、可能な限り南側へ拡張を行った。掘り込みの規模は、幅 3.9 m、深さ 1.4 m。断面形状は底が平らな逆台形を呈する。掘り込みの南肩は、東西土塁の北壁面とほぼ平行して東へ延びるようである。底面の標高は 14.8 m。掘り込みから遺物は出土していないが、空堀の底から戦国期の土師器皿が出土した。

東西空堀の横断面（第７図）　東西土塁頂部から北平坦面まで、東西空堀を南北に横断する。空堀は、土塁構築土から段丘礫層を掘り込んで作られている。規模は、幅約 7.5 m、深さ約 3.5 mである。断面形状は逆台形を呈する。底面の標高は 12.8 m。

土橋（第８図）　東西空堀を掘り抜いた後、空堀の底から盛土して約３mの高さに構築している。

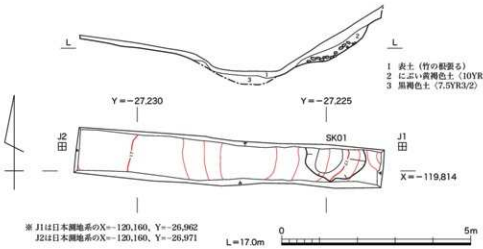


第８図　R1060−東調査区検出遺構図・土層図（1/100）

構築土は、空堀堆積土と異なり堅く締まっている。

東西土塁を縦断する斜面（第９図）　土橋を通り東西土塁を横断する小道の両側は緩やかな斜面となっており、東側の頂部には公園整備前まで菊一稲荷社が鎮座していた。土塁東側の斜面中程には多量の石が投棄された凹みがあり、中から狐の土人形や茶碗、瓦などが出土した。土塁西側の斜面は、表土以下に黒褐色土が堆積する。

東西空堀を埋め戻した形跡とその後の活用（第 10 図）　東西空堀の中で、唯一埋め戻された空堀の断面状況が残る。北壁の堆積土は東から西へ傾斜しており、上層は第２～４層に石礫混じりの堅く締めた明黄褐色土が堆積する。これより下層は、砂質土と石礫を多く含む層が堆積しており、長岡京期～江戸時代の遺物が出土した。本地点の空堀は、第７図のように凹みとして残っておらず、すでに地表面まで埋め戻された状態であり、空堀と直交する東壁では第２～ 18 層がほぼ水平に堆積する。しかし、北壁断面では東から西へ傾斜する堆積層となっており、東の高所



第９図　R1084−２トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）

から空堀内に土砂を流し込んだ状況が想定される。中でも土塁構築土には見られない上層の明黄褐色土は、通路となる地表の土を選別した可能性が考えられる。敷地境界の東側は、神足神社の手水所と参道になっている。東側から空堀内に土を投入する状況は、失われた土塁の存在を示唆する。なお、調査の最終段階で空堀底面と土塁北斜面を確認した。底面の標高は 12.9 m。

南北土塁の北崖面（第 12 図）　土塁が削られて断面が露出している。土塁構築土は、黄色系と黒色系の互層からなる下層と、細分が困難な礫層からなる上層に分けることができる。

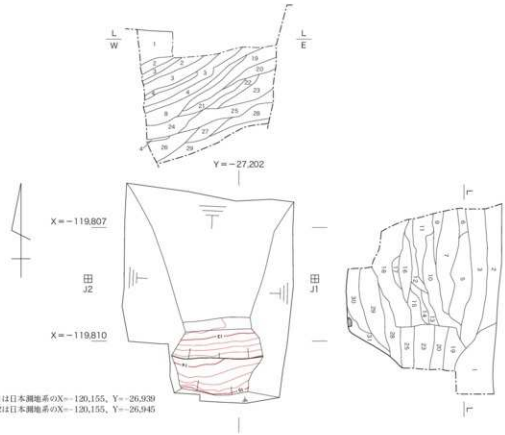
上層は、土質と土色の特徴から周辺の基盤層になっているにぶい黄橙色の低位段丘礫層を掘削し、土塁として盛土した土層と考えられる。この土塁構築土は、土塁構築土下層を覆うように、東斜面を中心に、厚さ約１m盛られ、西側には厚さ約 0.1 ～ 0.2 mの積み重ねが観察できた。

下層は、黄橙色と黒色の土が交互に盛られている。上層に比べて堅く締まった盛土で、礫や小石をあまり含まない。黒色土は土塁構築面の表土層に酷似し、黄橙色土は低位段丘を覆う土層に近く砂礫をあまり含まない。

南北土塁の西側に平行する溝（第 13 図）　右京第 733 次調査南トレンチから、土塁裾に接して掘られた南北方向の溝を検出した。溝は堅い段丘礫を掘り込んでおり、幅約 2.5 ～ 3 m、深さ１mである。延長部にあたる北トレンチではこの溝は検出されていないことから、途中で途切れるか西に折れ曲がっているものとみられる。土師器皿などが少量出土。溝底の標高は 14.7 m。

東西土塁の南側に平行する溝（第 14 図）　土塁に平行する溝は２カ所で確認した。右京第 1084 次調査４トレンチでは、表土を剝ぐと黄橙色と黒色の土が入り混じる構築土が現れる。土塁裾を画する溝は石礫を多量に含む。戦国期の土師器皿などが出土。溝底の標高は 13.8 m。

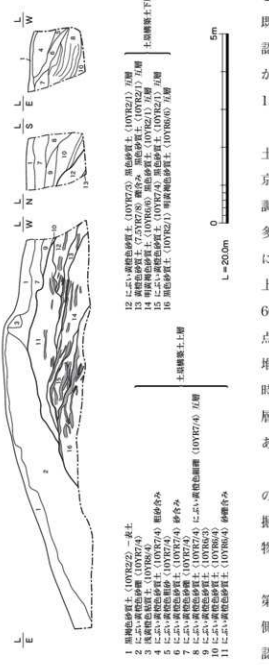
東西土塁の南側に平行する溝を覆う礫層（第 15 図）　右京第 1084 次調査５トレンチは、土橋から東西土塁を通り抜けた小高い平坦地となっている。東壁では、表土より下に砂質土と礫層が低い南側に向かって斜めに堆積する。東壁北端の第 13 ～ 24 層は、途中に礫層を含む薄く均等な層となっており、その南側の第 10 層には拳大の石礫が集中する。土塁と空堀以外で他より大



1　表土・埋め戻し土
2　明黄褐色土（2.5Y7/6）
3　明黄褐色土（2.5Y7/6）石礫含む
4　明黄褐色粘質土（2.5Y7/6）
5　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
6　灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
7　にぶい黄橙色砂礫（10YR6/3）
8　黒褐色土（7.5YR3/2）
9　にぶい黄褐色砂礫（10YR5/3）
　黒色土（10YR2/1）混じり　石礫含む
10　黒色土（10YR2/1）混じり
　にぶい黄橙色砂礫（10YR6/4）石礫含む
11　灰褐色土（7.5YR6/2）
　黒色土（10YR2/1）混じり
12　にぶい黄橙色砂礫（10YR7/4）
13　にぶい黄橙色土（10YR5/4）
14　石礫集中層
15　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
16　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
17　明黄褐色土（2.5Y7/6）
18　にぶい黄褐色砂礫（10YR5/4）
19　暗褐色土（7.5YR3/3）
20　暗褐色土（7.5YR3/3）
21　にぶい褐色砂質土（10YR5/4）
22　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）石礫多い
23　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
24　にぶい黄褐色砂礫（10YR5/4）
25　暗赤褐色砂質土（5YR3/2）
26　褐灰色砂礫（10YR4/1）石礫多い
27　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
28　黒褐色砂質土（10YR3/2）
29　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
30　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
31　褐灰色砂質土（10YR4/1）

第１０図　R1084−３トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）

第１１図　R1084−３トレンチ空堀に流入する土砂（南西から）



第 12 図　R1060–北東区画西辺
南北土塁北屋面土層図（1/100）

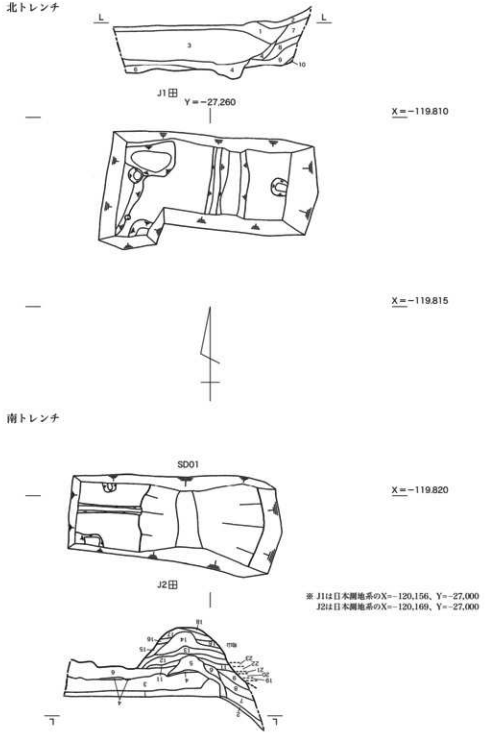
きい石礫を多量に含む厚い堆積層が確認されたのは既往の調査では初めてであり、第 29 層の下から確認した土塁に平行する溝を覆い隠すようである。溝からは戦国期の土師器皿などが出土。溝底の標高は 13.4 m。

東西土塁の南に開けた平坦面（第 16 図）　東西土塁の南側で比較的大きな調査が実施できたのは右京第 608・681 次調査のみである。右京第 608 次調査では、竹の根が張る表土層より、第 2 ～ 7 層に多量の石礫と炭、焼土塊、土器を含む堆積層が全面に広がっており、北から南に緩やかに傾斜する面を上層とした。層厚は約 0.6 m である。南側の右京第 608 次調査では、石組溝 SD02 を検出したが、本地点では関連する遺構は確認できなかった。これらの堆積層に含まれる雑多な集積物は、勝龍寺城の改修時に整理投棄されたものと考えられる。中でも包含層から出土した土師器皿の量は一連の調査で最多である。

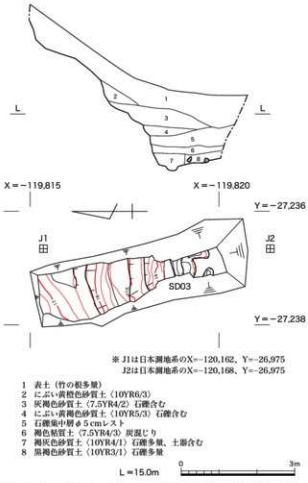
下層の調査では、主に鎌倉時代を中心とする方形の井戸側部材が残る直径 2.3 m の円形井戸、土坑、掘形内に石を据えた柱穴などを検出した。柱穴は建物になる可能性が高い。

東西土塁の南側で終息する堀（第 18 図）　右京第 631 次と第 681 次調査において、東西土塁の南側で北東辺が折れて狭くなって終息する南北堀を確認した。規模は、幅約 3 m、深さ約 1.2 m で断面は逆台形を呈する。底面の標高は 11.9 m。堀に堆積する土砂は、堆積状況から東側より流入したと想定されるが、滞水した様子が認められないことから空堀と考えられる。このほか、柱穴や土坑などが発見されているが、限られた範囲の中では詳細は不明である。堀の埋土は、概ね上層の黒褐色土、下層の黄褐色系土、地山直上の砂質土に分けられる。遺物は、埋め戻された埋土に投棄されたものであり、上層から 17 世紀前葉を中心とする唐津焼や信楽焼、土師器、瓦器などが出土した。下層から 16 世紀中葉に比定される土師器皿が出土したが、底付近からは出土していない。

東西土塁の断ち割り（第 19 図）　調査は、東西土塁の天頂部がくぼんでいる理由を探るために実施した。調査範囲は土塁天頂部から南側で終息する堀を結ぶ範囲とした。調査後は、できる



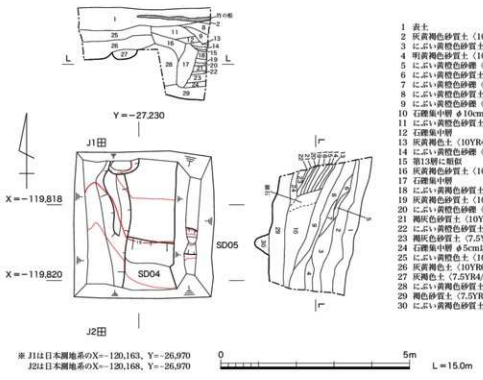
第 13 図　R733−検出遺構図・土層図（1/100）



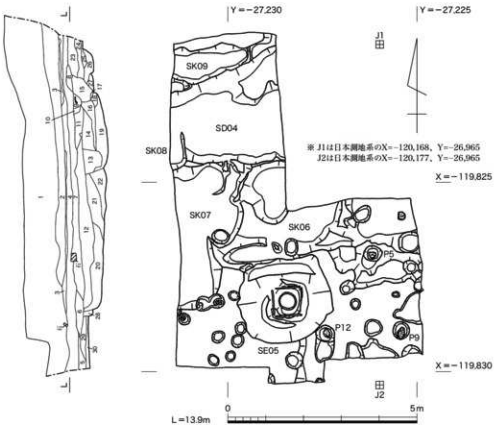
第14図　R1084−4トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）

だけ現況を損なわないように復旧した。

土塁を構築する層は、黒色土と明黄褐色土が交互に堆積する上層、石礫を多量に含む中層、堅く締まった暗褐色土系の下層からなる。北壁に現れたV字形の断面形は、土塁構築後に切り開いて通した通路とみられる。銅製の笄が出土していることから江戸期に開削されたものであろう。土塁を断ち割りした土層から出土した遺物は、弥生中期の土器、弥生後期〜庄内式の土器、平安後期の土師器や瓦器などがある。



第15図　R1084−5トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）



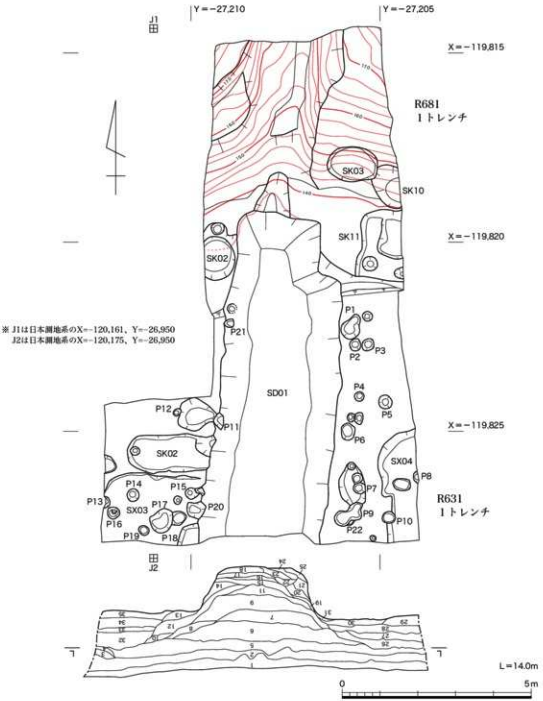
第16図　R681−2トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）

神足公園整備工事に伴う立会調査（第20図）

平成26年10月に立会14124次調査として実施した。整備工事は、土塁を覆う竹と樹木を伐採後、擁壁工事のため東西土塁の南面裾を掘削した。覆うものがなく一度に見渡せる断面には、既往の調査地3カ所と、土塁を構築する盛土が明らかとなった。工事中の記録作成は、時間的な制約もあり十分な検討ができなかった。

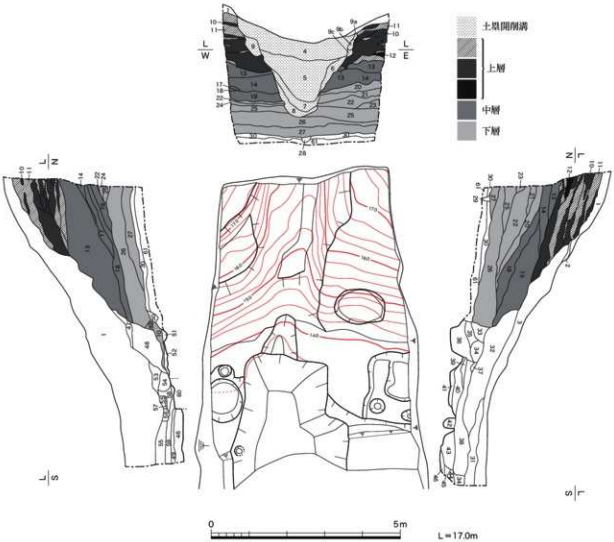
第17図　R681−2トレンチ東壁（西から）

断面図は、大まかに表土・盛土、砂礫と暗



1　表土
2　明黄褐色砂質土（10YR6/8）＋暗褐色砂質土（10YR3/3）
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
4　明黄褐色パラス（2.5Y6/6）
5　褐色砂質土（10YR4/6）
6　黒褐色礫混じり土（7.5YR3/2）
7　黄褐色砂質土（10YR5/8）小礫含む
8　明黄褐色砂質土（10YR6/8）小礫含む
9　暗褐色砂質土（10YR3/4）細かな礫
10　明黄褐色砂質土（10YR6/6）＋赤黒色ブロック（10YR2/1）
11　褐色斑紋入褐灰色砂質土（10YR6/1）細かな礫と小礫
12　褐色斑紋入褐灰色砂質土（7.5YR4/1）細かな礫と小礫
13　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）小礫含む
14　褐色斑紋入灰色砂質土（N5/）細かな礫多く含む
15　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）細かな礫少中
16　暗灰色パラス（N3/）5cm大の小石少中
17　褐色斑紋入灰色シルト（N5/）
18　灰色パラス（10Y4/1）細かな礫含む
19　赤黒色シルト（5R1.7/1）
20　黄色シルト（5Y8/6）＋灰色砂質土（5Y6/1）小石含む
21　褐色斑紋入灰色砂質土（N5/）
22　灰色砂質土（10Y4/1）暗灰色ブロック混じり
23　黄色シルト（5Y8/6）ブロック
24　灰色砂質土（N5/）細かな礫含む
25　オリーブ灰色パラス（2.5Y5/1）礫細かい
26　黒褐色礫混じり土（7.5YR3/2）
27　褐色粘質土（7.5YR4/4）黒褐色ブロック混じり
28　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
灰色粘質土（2.5Y8/6）ブロック混じり　小礫多量
29　褐色礫混じり土（10YR4/6）
30　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
31　暗灰色土（N3/）黒色ブロック混じり
32　明黄褐色砂質土（10YR6/6）
33　暗褐色砂質土（7.5YR3/3）
34　褐色土（10YR4/4）
35　黄褐色土（10YR5/8）

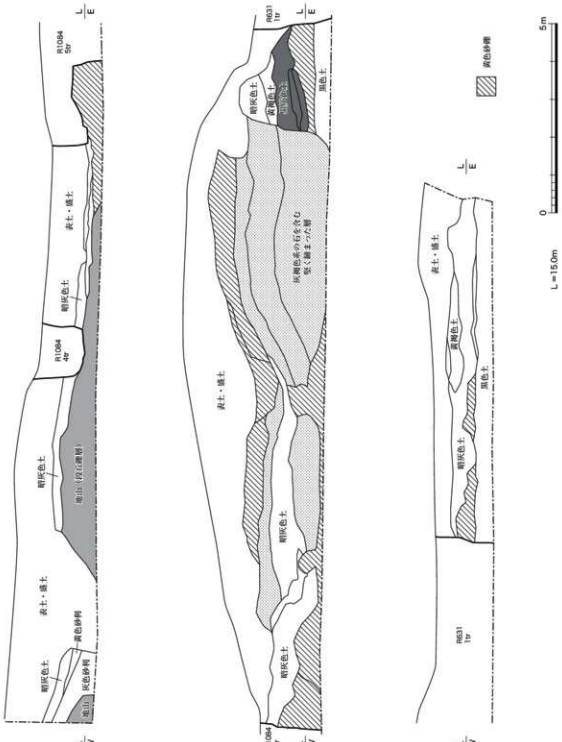
第18図　R631・681－1トレンチ検出遺構図・土層図（1/100）



1　表土（竹の根株多い）
2　灰褐色土（7.5YR5/2）
3　褐色砂質土（竹の根が残る）（7.5YR4/4）
4　暗褐色土（竹の根株多い）（7.5YR3/4）
5　にぶい黄褐色土（10YR5/4）黄橙色ブロック混じり
6　灰褐色砂質土（7.5YR5/2）黄橙色ブロック混じり
7　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）黄橙色ブロック混じり
8　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）黄橙色ブロック混じり
9　黒褐色土（7.5YR2/1）橙色ブロック混じり
9a　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
9b　にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）
9c　灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
10　黒色土（7.5YR2/1）
11　明黄褐色土（10YR6/8）
12　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
13　明黄褐色砂礫（10YR6/8）
14　明褐色土（7.5YR5/8）
15　明黄褐色砂礫（10YR6/6）
16　明褐色砂礫（7.5YR5/8）黒褐色ブロック混じり
17　淡黄色砂礫（2.5YR4/4）
18　黒褐色土砂礫（5YR3/1）
19　黒褐色土（5YR2/1）明褐色砂礫（7.5YR5/8）混じり
20　黒褐色土　明赤褐色土混じり
21　褐色土（7.5YR3/3）黄橙色ブロック混じり
22　黒褐色土（7.5YR3/1）明黄褐色（10YR7/6）ブロック混じり
23　黒褐色土（10YR3/1）にぶい黄橙色（10YR6/3）ブロック混じり
24　浅黄橙色砂（10YR8/3）＋暗褐色土（10YR3/3）（礫多く含む）
25　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
26　暗褐色土（10YR3/3）
27　暗褐色土（7.5YR3/3）
28　黒褐色土（7.5YR3/2）　－SD12
29　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
30　にぶい橙色砂質土（2.5YR6/3）
31　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
32　褐色砂質土（7.5YR4/3）
33　黄褐色砂礫（10YR5/8）黒褐色土混じり
34　褐色砂質土（10YR4/6）
35　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
36　にぶい赤褐色砂質土（5YR4/4）黄褐色ブロック混じり
37　暗褐色土（10YR3/4）
38　黄褐色砂質土（2.5YR5/3）
39　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）明赤褐色ブロック混じり
40　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）黄褐色ブロック混じり
41　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）橙色ブロック混じり
42　明褐色土（7.5YR5/8）
43　黒褐色砂質土（10YR3/1）
44　黒褐色砂質土（小礫含む）（10YR3/4）
45　黒褐色土（2.5Y3/1）
46　褐灰色土（7.5YR4/1）黄褐色ブロック混じり
47　暗褐色土（10YR3/4）黄褐色ブロック混じり
48　灰黄褐色砂質土（10YR6/2）黄褐色ブロック混じり
49　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）黄褐色ブロック混じり
50　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）
51　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）明褐色ブロック混じり　－SD13
52　黒褐色土（7.5YR3/1）明褐色ブロック混じり
53　明黄褐色砂質土（10YR6/8）黄褐色ブロック混じり
54　黄色砂礫（2.5Y8/8）
55　黄褐色砂質土（10YR5/8）
56　明黄褐色砂（10YR6/8）
57　黒色土（7.5YR2/1）
58　にぶい黄褐色土（10YR4/3）黄褐色ブロック混じり
59　褐色砂質土（10YR4/4）
60　灰黄褐色土（10YR4/2）黄褐色ブロック混じり　－SK02
61　地山

土塁開削溝
上層
中層
下層
SK10
SK11

第19図　R681－1トレンチ壁面土層図（1/100）



第 20 図　勝龍寺城土塁立会断面図（1/100）

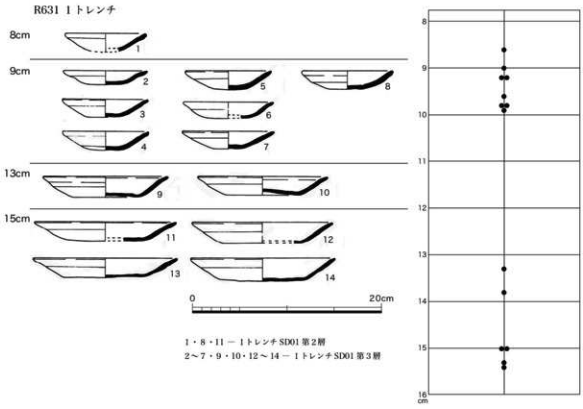
灰色～黒褐色の土層に分かれる。全体を見渡すと、右京第 631 次調査の東側はほぼ水平に堆積しているが、西側では土塁の一部が饅頭状の高まりとなる。これより右京第 1084 次調査 5 トレンチまでは砂礫層を中心に波打つように堆積する。土層は堅く締まる。一見すると、饅頭状の高まりに砂礫層が覆うようにみえることから、両者の堆積状況は異なるかもしれない。これより西側では、下方に段丘礫層が現れる。

4　出土遺物

各年次の調査で出土した遺物量は、整理箱に合計 32 箱である。弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、貿易陶磁器、瓦、埴輪、石製品、土製品、木製品、金属製品などがある。遺物の大半は、東西土塁の南に開けた平坦地の調査地から出土したものが最も多く、土塁や空堀から出土した遺物は少ない。本報告では、各報告書の中から年代比定の基準となる土師器皿の実測図を抽出し、一部縦軸口径分布図を設けた。土師器皿の分類にあたっては、形態、胎土、調整手法などから乙訓在地産、京都産白色系、京都産白色系を模倣した乙訓在地産の３種類に分けることを試みた。京都産と模倣する在地産の皿については、厳密に区別できないところがあり、ここではまとめて京都白色系として記述する。その他の遺物については、器種ごとにまとめて報告する。なお右京第 1060 次調査の出土遺物は本報告が初出である。

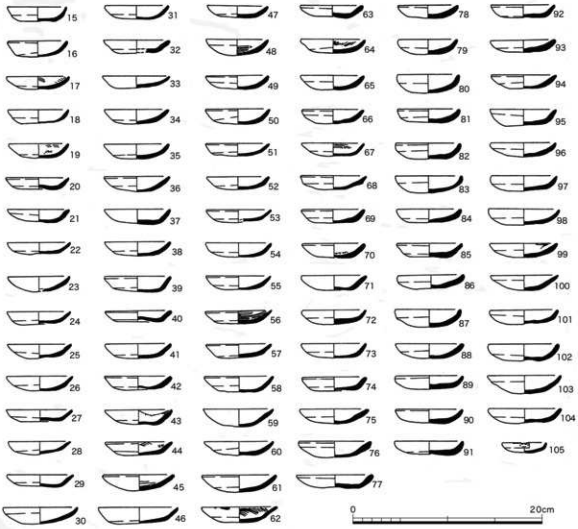
東西土塁の南側で終息することが判明した堀からは、一連の調査で初めて勝龍寺城に関わるまとまった量の遺物が出土した。第 21 図は、右京第 631 次調査１トレンチ堀出土。土師器皿は、口径 9cm 台を中心とする小皿と、口径 13 ～ 15cm 台の大皿がある。大皿は、平らな底部と直線的に延びる口縁部からなり、底部の周縁には浅い凹みとわずかに突き出た凸状の高まりを持つ圏線が巡っている。これらの土器は京都産白色系と京都産白色系を模倣した皿が含まれており、元亀２（1571）年の細川藤孝による城の改修時に投棄されたと想定される。

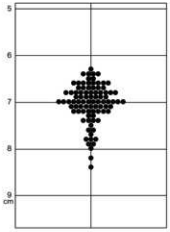
東西土塁の南に開けた平坦面の調査では、多量の石礫と炭、焼土片とともに多くの遺物が混在



第 21 図　R631−遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

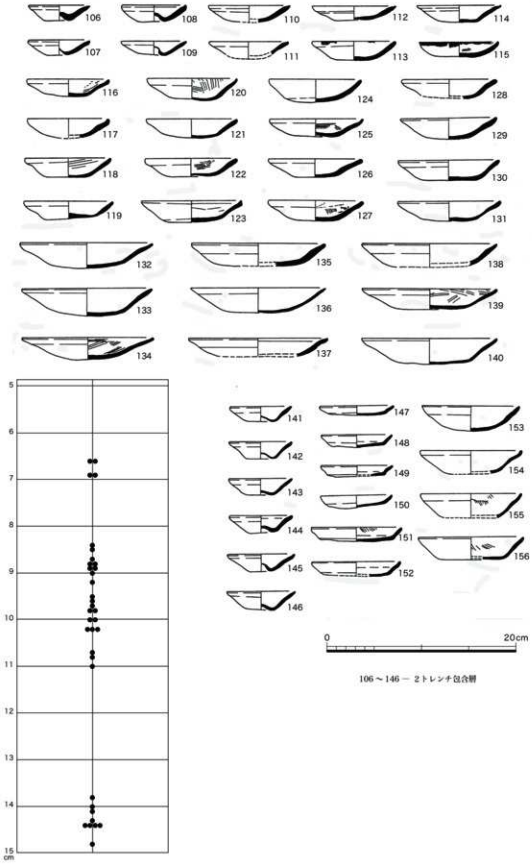
R681 2トレンチ－1



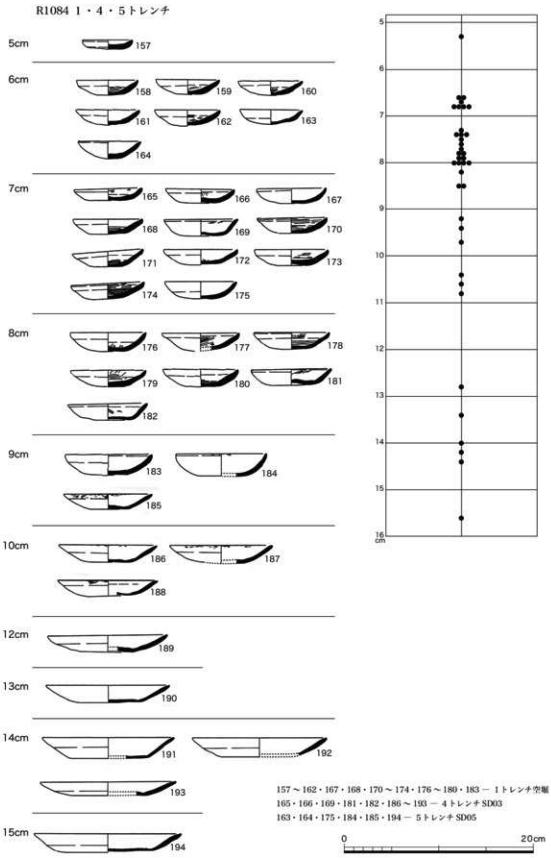


第22図　R681－遺物実測図と最軸口径分布図－1　(1/4)

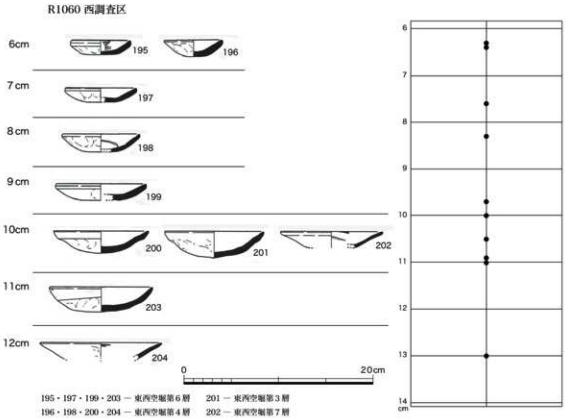
R681 2トレンチ−2



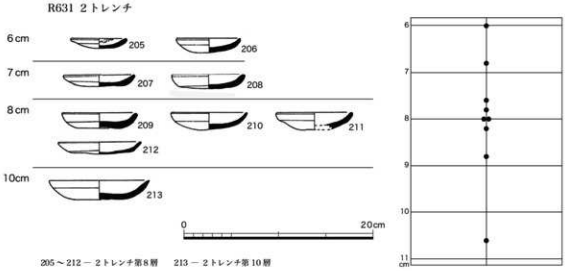
第23図　R681−遺物実測図と縦軸口径分布図−２（1/4）



第24図　R1084–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

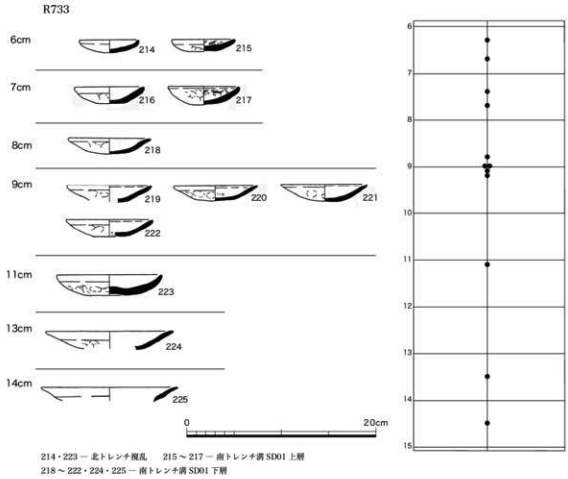


第 25 図　R1060–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）



第 26 図　R631–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

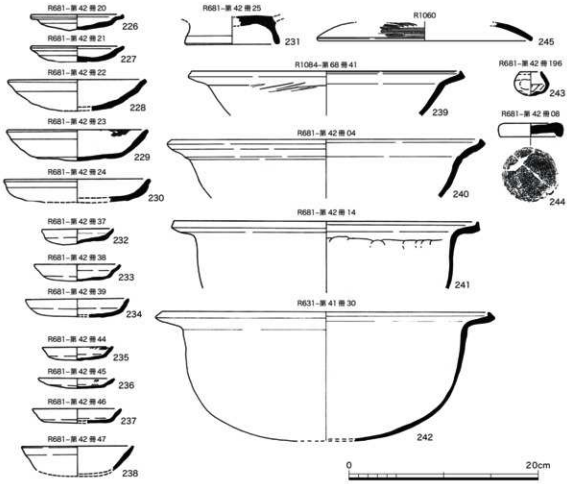
する堆積層からまとまった量の土師器皿が出土した。第 22・23 図は、右京第 681 次調査 2 トレンチ出土。第 22 図では乙訓在地産の小皿を 90 点図示した。口径は 7 cm 台を中心にまとまりのある分布を示す。口縁部の形態は、外反気味に開いて底部との境目に稜を持つものと、丸く立ち上がるものがある。歪みがあり、胎土に赤色粒子を含む。内面にハケメを残すものがある。第



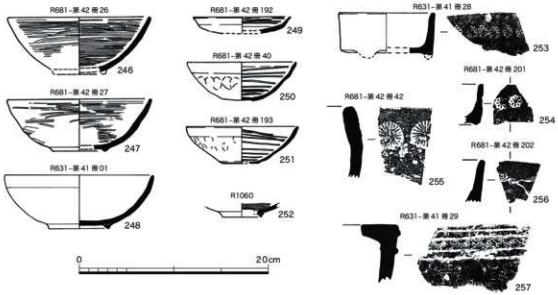
第 27 図　R733–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

23 図は、京都産白色系と京都産白色系を模倣した乙訓在地産の皿である。113 ～ 139 は、器壁が厚手である。同一個体であっても手づくねのため、口縁部の形態には差異が認められる。141 ～ 146 は、へそ皿。底部には底を押し上げた爪痕が残る。口径 6 ～ 7 cm 台。小皿は、口径 8 ～ 10cm 台。大皿は、口径 14 cm 台。胎土に赤色粒子を含み、内面にハケメを残すものがある。141 ～ 156 は、室町時代中頃の遺物である。

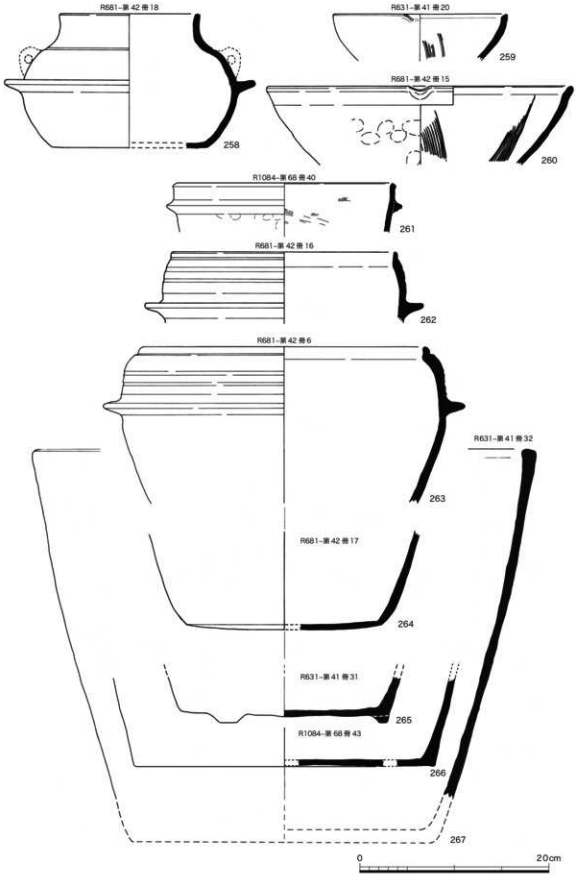
東西土塁の南側に平行する溝と、東西空堀の底から土師器皿が出土した。第 24 図は、右京第 1084 次調査の 1 ・ 4 ・ 5 トレンチ出土。小皿は、乙訓在地産で口径 6 ～ 8 cm 台。京都白色系は 10 ～ 15 cm 台。特に 5 トレンチの溝を覆い埋める厚い石礫層は、細川藤孝による城の改修に伴い移動再堆積した層とみられる。第 25 図は、右京第 1060 次調査西調査区出土。202･204 は、戦国期の特徴を持つが、その他は 17 世紀代の所産である。第 26 図は、右京第 631 次調査 2 トレンチ出土。近世後半の土人形などとともに出土した。第 27 図は、右京第 733 次調査出土。南北土塁の西側裾を画する溝から 8 ～ 9 cm 台と 13 ～ 14 cm 台の京都白色系の皿が出土した。第 24 図の皿と類似する。



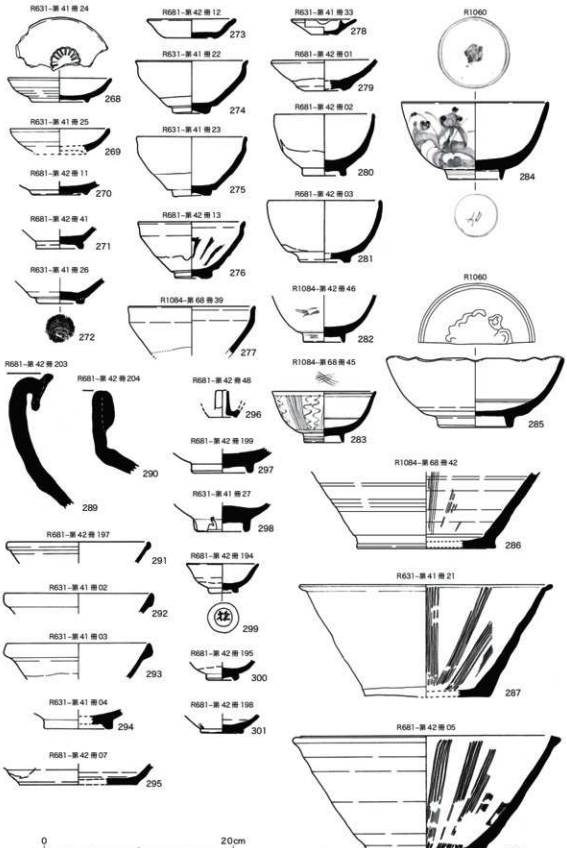
第28図　土師器実測図（1/4）



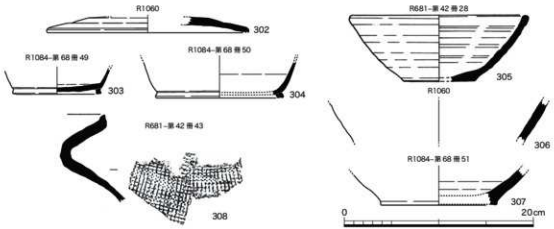
第29図　瓦器実測図-１（1/4）



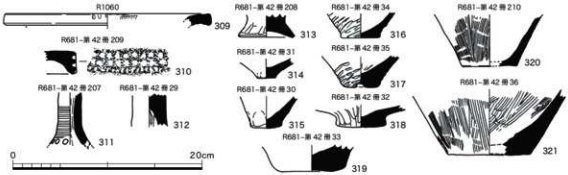
第30図　瓦器実測図－2（1/4）



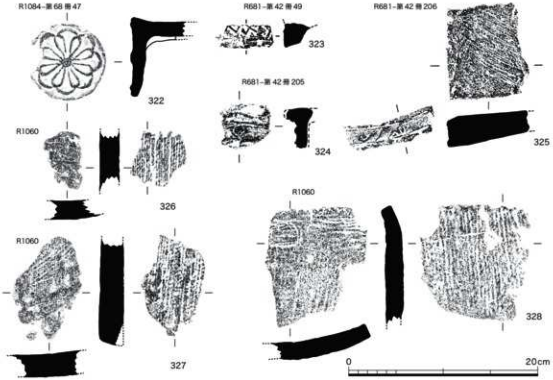
第31図　陶磁器実測図（1/4）



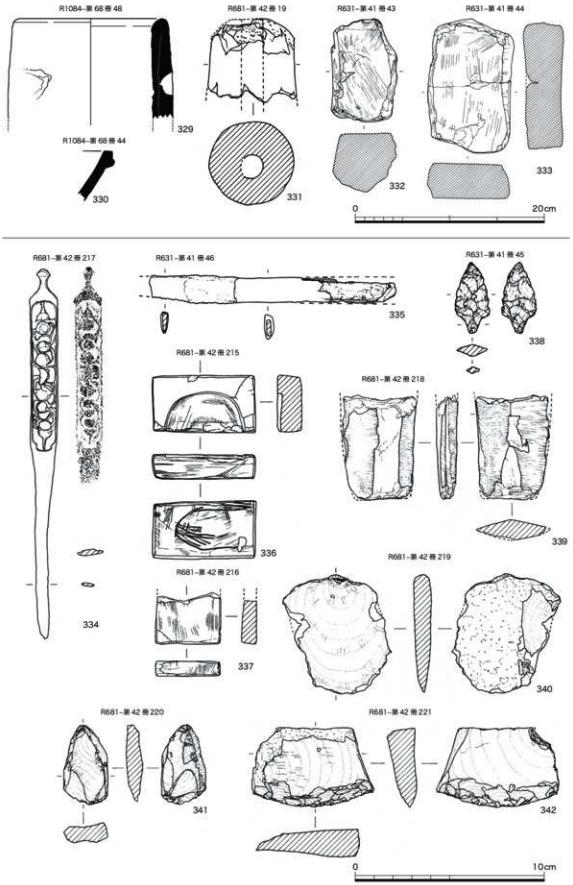
第32図　須恵器実測図（1/4）



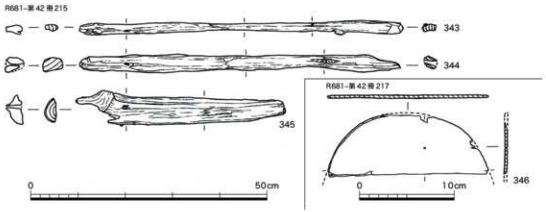
第33図　弥生土器実測図（1/4）



第34図　瓦実測図（1/4）



第35図　石製品・金属製品実測図（1/4・1/2）



第36図　木製品実測図（1/8・1/4）

5　小　結

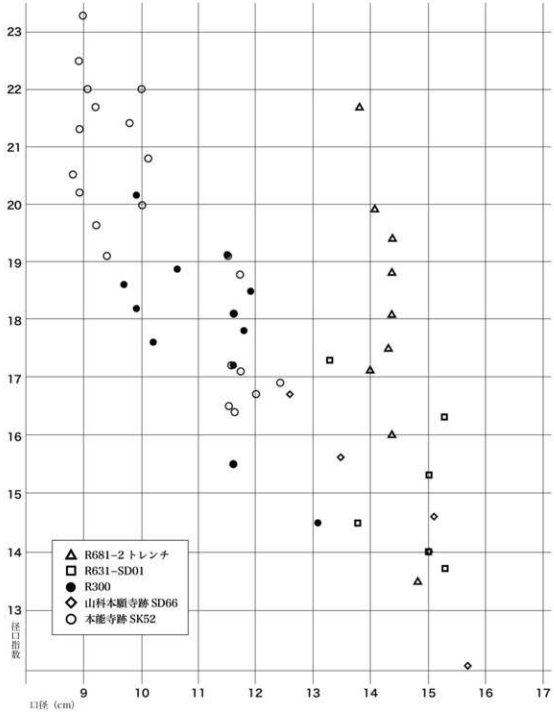
勝龍寺城外郭の土塁と空堀は、5年次にわたる発掘調査と整備工事に関連して立会調査を行うことができた。市街地に残存する戦国時代の土塁と空堀が、鬱蒼とした竹藪から遊歩道のついた公園に生まれ変わる過程で、初めて明らかになった事実は多い。

土塁・空堀の造営と改変　現存する土塁と空堀は、元亀2（1571）年に細川藤孝によって改修された遺構として評価されている。都市化の進展に伴い目に見える城跡は失われているが、古老の話や古い地図、発掘調査からかつての有り様が復元される。しかし、その成果は想定内にとどまる以外に新たな問題を提起することとなった。

一連の発掘調査で特筆されるのは、南北土塁の下から発見された掘り込みである。その形状は断面逆台形を呈し、東西方向に延びる可能性は高いが、東側は空堀の底面を約3 m掘り下げるため遺存しない。土塁の標高は、南北土塁が最も高く、東西土塁は稲荷の小祠や開削された状況から凹凸のあるラインを描いている。土塁の構築土は、黄色系と黒色系の土を交互に積み重ねるが、南北土塁ではその上に砂礫層が覆うことが判明している。これは空堀を掘り下げた土を積み上げたものであり、細川藤孝による改修時のものと考えられている。黄色系と黒色系の構築土に砂礫が盛られた時期は不明であるが、少なくとも土塁と空堀は一定の期間をおいて造営と改変が行われた状況が明らかとなった。

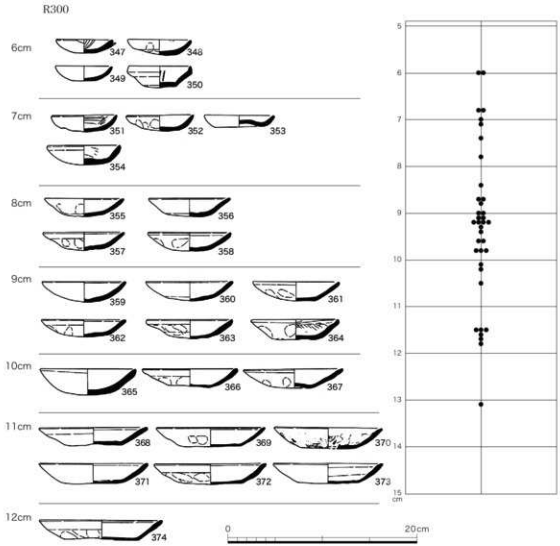
一方、東西土塁の東端で実施した右京第1084次調査では、東側から土砂が投入された痕跡があり、その一部は土塁から供給された可能性がある。空堀を埋める表土には黄白色の上質な客土を用いており意図的に土を選別したと考えられる。丁寧な作業を行っているのは、神足神社の参道が本殿から南に延びており、この間に空堀と交差するためであろう。空堀の南側は、東西土塁の一部が開削されたところであり、土塁と空堀を通る道として一時利用されたと考えられる。

立会調査では、土塁の裾を広く全体に見ることができた。土塁は、標高19 m付近から東側に黄色系と黒色系の構築土がみられたが、西側では砂礫層が厚く堆積しており、一様ではないことがわかった。



第37図　勝龍寺城と戦国期の土師器皿

出土遺物の年代観　空堀から出土した遺物は少なく、底付近から新旧混在した土師器と陶磁器が出土した以外は、近現代の雑多なものが投棄されていた。土塁は一部で断ち割りを行い、構築土から弥生土器と平安時代末の土師器や瓦器などを確認した。部分的な調査であるが、中世遺物を含まないのは偶然か実際かは不明瞭である。現存する土塁と空堀は、細川藤孝による元亀2（1571）年の改修によって残された遺構であるが、発掘調査では埋め戻された堀や溝、土塁を覆う砂礫層などから16世紀中頃を中心とする遺物が出土した。これは改修時に前代の遺構を埋め

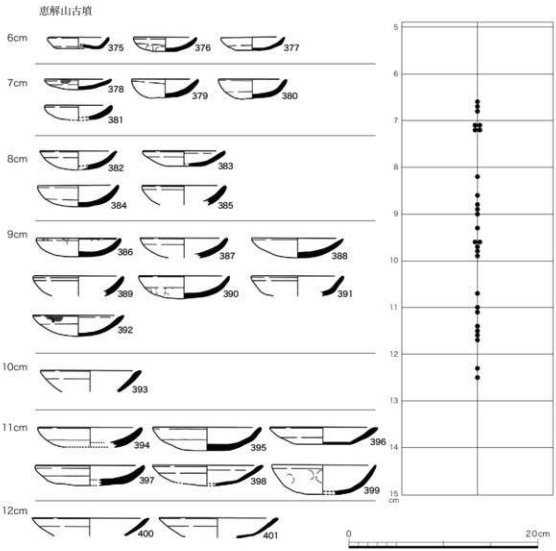


第38図　R300–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

戻した中に投棄されたものと考えられ、新しいプランの中で遺構が選択された可能性がある。

土師器皿は、手づくね成形で作られている。管見によれば、乙訓地域の土師器皿は、乙訓在地産と持ち運ばれた京都産の白色系があり、この他に白色系を模倣した在地産の3種類を想定している。本稿では、京都の暦年代資料[注1]と比較するため白色系の皿の変化をたどることにする。

縦軸口径分布図は、口径別の個体数量をドット数で表している。遺物が少ないと分布に変化がなく、各資料の分布の中心がどこにあるのかが判然としない。乙訓地域の出土例に多いパターンとなっている。第37図は、径口指数による散布図である。R681–2トレンチ（△印）と、R631–SD01（□印）は、口径14～15cm台に分布する。類似するデータとして山科本願寺跡[注3]SD66（◇印）を取り上げた。天文元（1532）年に法華宗や六角氏に攻められて焼け落ちている。出土した土師器皿は、口径12～15cm台と18cm台まであり、分布の幅が大きく新旧の要素を含むものと考えられる。京都X期中。概ね本地点の資料もこれに該当する。一方、勝龍寺城跡の本丸地点から出土したR300出土の土師器皿（●印）は、口径9～11cm台を中心に分布している。



第 39 図　恵解山古墳–遺物実測図と縦軸口径分布図（1/4）

口径分布に幅があり、新旧の要素を含むと考えられるが、外郭地区から出土した皿と比べて口径と器高が縮小している。同様の事例に、恵解山古墳の史跡整備[4]に伴う遺物がある（第 39 図）。天正 10（1582）年の山崎合戦で陣城として使用されており、勝龍寺城跡と同様の土師器皿や湯釜が出土している。本能寺跡[5] SK52（○印）は、山崎合戦と同年に起きた本能寺の変後の焼け跡整地層である。皿は口径 9 cm 前後の丸底の皿と、口径 11 ～ 12 cm 台がある。京都Ⅹ期新。

今回の一連の調査では、地名や坪付図から想定される神足城跡の遺構を、細川藤孝が選択して勝龍寺城の改修に取り込んだことがうかがえた。東西土塁の南側では、法量的にまとまりのある遺物が出土しており、城の改修が短時日のうちに行われたことを物語る資料と考えられる。

注 1）小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房　2005 年
2）永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡 1」『京都市研究所概要』平成 9 年度
3）岩崎　誠「勝龍寺城跡発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第 6 集　1991 年
4）岩崎　誠・山本輝雄ほか「墳丘の出土遺物」『長岡京市報告書』第 62 冊　2012 年
5）吉川義彦『本能寺跡発掘調査報告』関西文化財調査会　2008 年

第２章　勝龍寺城研究の再検討

福島　克彦（大山崎町歴史資料館）

はじめに

近年、畿内・近国の平地城郭跡に対する関心が高まり、この分野の研究が大きく進展している。特に山科本願寺、高屋城、池田城、伊丹城などでは、現存遺構に加え、発掘調査によって外郭線が確認され、城郭の大規模化が明らかになった。[注1] こうしたなか、文献、考古資料においてバランスよく残るのが、乙訓郡の勝龍寺城跡である。

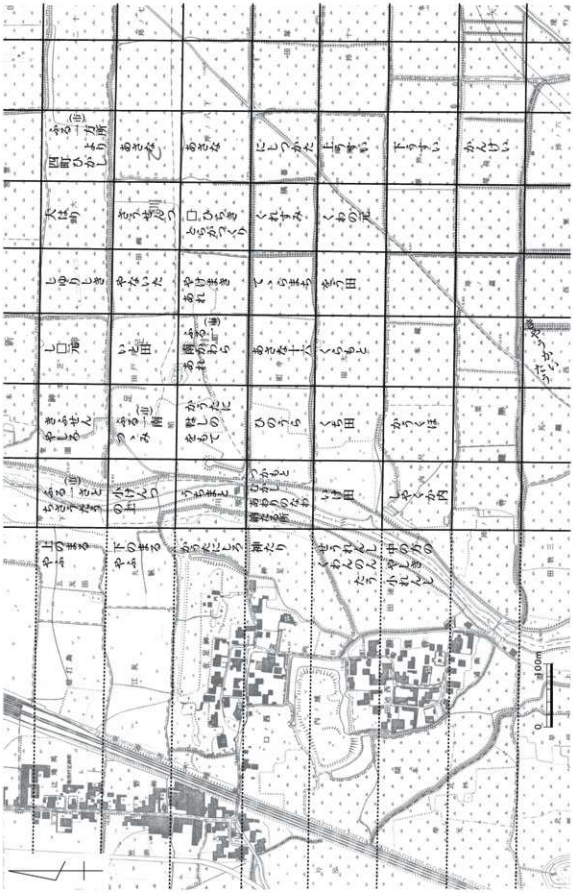
勝龍寺城跡は、山城国乙訓郡における代表的な平地城館であり、文献史料的には、少なくとも応仁文明の乱時代から登場する。以後も戦国期城郭として使用されたが、元亀２年（1571）から天正８年（1580）にかけて、細川藤孝が乙訓郡の拠点的城郭として拡張した。[(2)] また、1988 年には長岡京市によって勝龍寺城主郭部の発掘調査も進められ、藤孝時代の遺構、遺物も数多く検出されている。[(3)] 特に明智光秀の築城した坂本城の巴紋の同笵軒丸瓦が確認されたことは、当該期の瓦研究の可能性を大きく前進させた。[(4)] また、主郭北西隅における折れを伴う枡形状虎口は、当城の新しい要素を打ち出すものとして評価されてきた。[(5)] さらに主郭の北東約 200 m に位置する神足神社周辺に残る土塁と堀は、平地城館における外郭線残存遺構として稀有な存在である。この外郭線、およびその周辺も発掘調査が進展しており、周囲の土塁を伴わない堀跡も確認されている。この外郭線の存在によって、藤孝時代の勝龍寺城が規模的にも拠点的城郭として風格がある存在だったと言えよう。

その一方で、勝龍寺城周辺には 16 世紀初頭の「勝龍寺近隣指図」（『九条家文書』以下「近隣指図」）が残っている。この絵図に描かれた方形区画は、以前は勝龍寺城主郭部分と捉える意見もあったが、近年は近接する神足城跡とほぼ認識されている。[(6)] 同図は中世後期の平地居館を描いた古地図としても貴重な存在であり、前述の勝龍寺城外郭線を評価すれば、両者は重複した存在と言えよう。

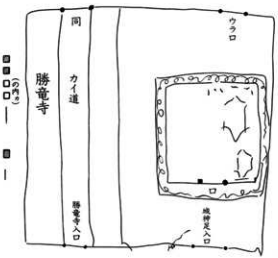
このように勝龍寺城と神足城は方法論を個別的に見れば、文献史的にも考古学的にも、量的には大きく成果が蓄積しつつある。さらに 16 世紀通じて考察できる城郭遺構として稀有な存在と言えよう。ただ、こうした新しい研究成果を集約した上で、構造全体を見渡した考察は充分されていない。当城郭は、主郭、外郭線とも発掘調査が一定度進展している一方、中世後期の図面が残る神足城跡が隣接、重複しているなど、問題点を共有化する必要がある。以下、テーマに基づいて考察を深めてみたい。

１　神足城跡の位置

ここでいう神足城跡とは、「近隣指図」に現れる正方形区画のことを指す。同図には堀の区画を意識した二重の線の区画があり、「城神足入口」などの表記があり、明らかに神足城のことを



第 40 図　大正 11 年の都市計画基本図と乙訓郡条里坪付図解読図（部分）（1/6000）



第41図　勝龍寺近隣指図（『九条家文書』）正方形区画が神足城（『長岡京市史』資料編（二）より）

指すと思われる。他にも実線で描写した広い範囲の区画が見られるが、残念ながら東西南北の表示がないため、現地比定が困難であった。ただ、当城が一連の『九条家文書』の引付によると、細川政元の有力内衆の香西元能が、この神足城に入ったものと考えられる。これに対して、直務支配を目指す九条政基は、香西氏に抗議し、入城しようと試みている。政基は一時城に入ることができたが、その後九条家の家人たちが入城しようとしても「木橋」を取り払われるなどの妨害を受けた。政基やその家人が小塩荘を治めるにあたって、これだけ入城に拘った点は注目される。つまり、城に入っていることと、小塩荘支配が密接に関係していることを示す。こうした事実は、同城が九条家の広域荘園小塩荘の政所屋敷であったことを示している[7]。本来神足氏の居館だった場所を、その没落後に香西元能が政所屋敷に使用していたものと思われる。同時に香西氏という守護代の一族が入ったことから勘案しても、当時の守護領国の支配機構の一環を担っていたものと思われる。小塩荘が乙訓郡の広域の散在荘園であったことも、こうした郡の統治には役立ったはずである。

ところで、乙訓地域には「乙訓郡条里坪付図」（『九条家文書』宮内庁、以下「坪付図」と略す）が残っており、同地域の農村景観の復原に使われてきた[8]。同資料は同図の「ふる一（市）　九郎二郎」の表記と大永2年（1522）の「小塩荘帳写」（『九条家文書』）の古市村の欄の「九郎二郎」と同一人物と捉えられており、永正元年から大永年間までと推定されている[9]。この古市の「九郎二郎」が同一人物の論証は、まだ課題を残すと考えられるが、基本的には表記のあり方から16世紀前半の範囲でおさまると考えられる。

同資料によれば、格子状の区画に小字が記されていること、および斜行して進む久我畷が描かれていることから、ほぼ現在の地形にトレースすることができる。この資料で、第一に注目されるのは古市村周辺に「ふる一（市）南つゝみ」「かうたにはしのをもて」（神足）「ふる一（市）南かわら　あれ」の表記があり、少なくとも当時の小畑川が現在の位置と重複していたと考えられる点である。「あれ」の表記は東の「やけまさ」まで広がっているが、これは大正11年の都市計画基本図の土地状況とも一致している。近年の発掘調査によれば、小畑川は、現在の一文橋（向日市・長岡京市境界）から東へ流れる流路が確認されており[10]、少なくとも支流の一部は東へ向きを替え、桂川と合流していた。そのため、現在の古市、神足、勝龍寺を流れる流路がいつまで遡及できるか、明確ではなかった。少なくとも「坪付図」によって、現在と同じ小畑川の流れが確認し得る。

第二に図の西辺に「五のつほ　かうたにしろ」という区画が表記されていることである。これ

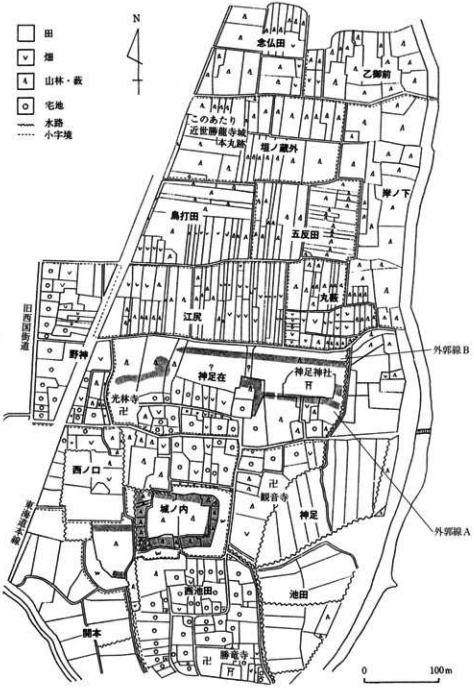
によれば「四のつほ　神たり」の北、「六のつほ　下のまるやふ」の南側にある区画である。「坪付図」を地図上にトレースした上で、この「かうたにしろ」を現地比定すると、ほぼ現在の神足神社周辺となる。南側は「神たり」となっており、近代以降の神足集落のやや東側となる。現在の地形では神足の台地上に「かうたにしろ」があり、「神たり」よりも高地に位置していたと考えられる。

したがって、神足城跡の遺構範囲は、ある程度限定できることになった。当然、発掘調査成果が注目されるが、現段階では、明確な遺構は確認されていない。右京第339次[121]調査では、前述の区画のうち、北東部が発掘されたが、藤孝時代の外郭線の堀は検出されたものの、16世紀前半の堀跡は看取されなかった。以後も、堀跡はいくつか確認されたが、後述する藤孝時代の土塁・堀によって断ち切られており、それ以前の遺構と評価できなかった。そのようななか、2014年の右京第1084次調査のSD02が注目される。これは現存する外郭線の東西土塁のうち、土塁構築以前の段丘礫層を掘削する掘り込みSD02の断面が確認された。これにより藤孝の土塁・堀以前の堀が確認されたことになり、過去の堀の遺構の可能性が見られる。また、同調査では、堀底や土塁周辺の溝跡を検出し、16世紀中葉の土師器、瓦器羽釜片を出土している。さらに、土塁の南側に付随する溝SD05からも16世紀中葉の土師器皿、白色系皿が確認されている。これらは同区域に16世紀中葉の生活痕があったことを示している。残念ながら、現状では「近隣指図」の方形区画まで考察は深められないが、やはり神社周辺である点は注目される。

2　外郭線の築造

次に、その外郭線（惣構）の考察を進めたい。勝龍寺城跡には大字神足に二つの外郭線が残存していた。これを便宜上外郭線A（南側）、外郭線B（北側）と表現する。前者の外郭線Aは、現在も神足神社境内、参道として残存しており、近年は公園整備もなされている。外郭線Aの土塁内部の遺物は充分に検出されていないため、出土遺物から年代を追求するには至っていない。ただ、前述したように、周囲で確認されている地下の堀跡は土塁のラインで切られており（右京第631次など）、この外郭線の土塁・堀の優先度が強い（第３図）。そのため、一般的に藤孝時代の築造と考えられている。元亀２年（1571）10月、織田信長は「勝龍寺要害」の普請のため、細川藤孝に西岡の村落からの人夫徴発を命じている（『細川文書』）。「要害」という表現からも、この時期に勝龍寺城の外郭線普請を築いた可能性がある。

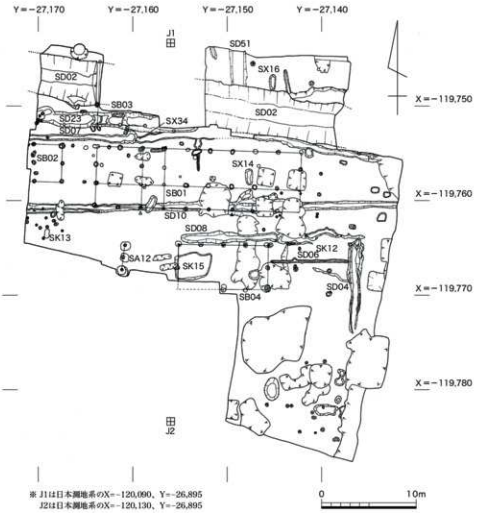
さて、この外郭線Aの特徴であるが、現存している土塁は南北土塁と東西土塁が接続し、屈曲を伴っている。言うまでもなく、堀は北側に沿っているため、南が城内側、北が城外側となる。そのため、接続部は北へ張り出した状態となっている。この箇所は現存土塁でももっとも高い箇所になっており、防御上の要となっている。高低差も堀底から土塁上部まで８mほど確認できる。ただ、これは単に外側へ張り出した土塁だけではない。南北土塁は、外郭ラインから南の内側へ約10m程度城内側に延長されている。つまり、城内を画定する土塁という性格も伴っていた。前述したように、この南北土塁から東へ45mの位置には同じく南北の堀が検出されていた。こ



第42図　勝龍寺城跡周辺地籍図（大山崎町歴史資料館 企画展示図録「京都の城、乙訓の城」(1998)）より

のように外郭線の内側の空間は、土塁や堀で仕切られていたことがわかる。なお、右京第608次調査では、一石五輪塔を複数基礎に置いた石組みの井戸が検出されている。転用石材の利用から、これも藤孝時代と考えられているが、外郭線内部が土塁や堀で区切られていたこと、その区画内部には井戸が確認されていることがわかる。

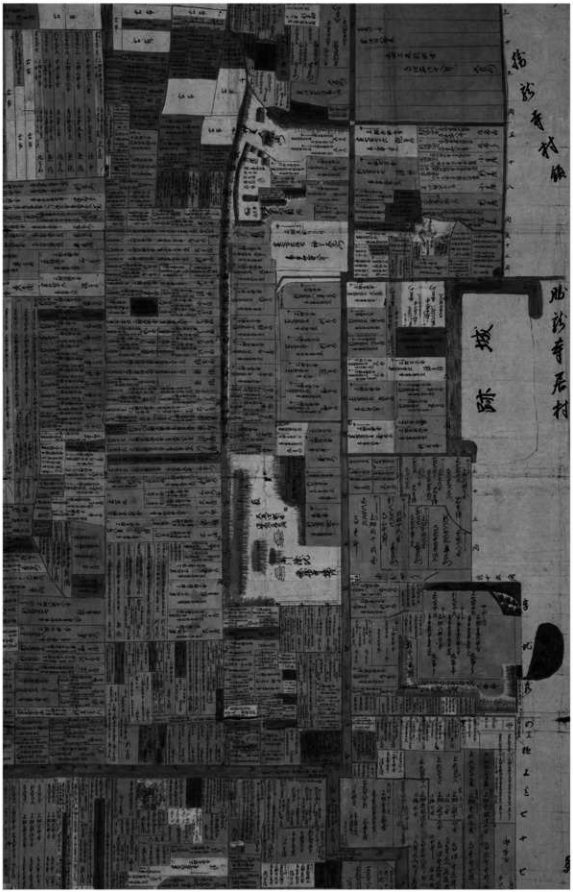
さて、以上述べた現存する外郭線Aとは別に、外側にあたる北50 mに位置する別の外郭線Bが構築されている。これは、大正11年の都市計画基本図にケバ表現によって土塁線が確認できる。



第43図　R339−上層検出遺構図（1/400）

付随する道路との間が堀跡と考えられ、外側に堀、内側に土塁が設けられていた。堀の東端は前述したように右京第339次調査でも検出されており、発掘調査でも確認されている。つまり、二つの外郭線A、Bが至近距離でほぼ東西に連なっていたことになる。最初に取り上げた外郭線Aは屈曲を伴う遺構であったのに対して、外郭線Bはほぼ東西に一直線で神足の台地を貫いている。

こうした至近距離で外郭線が築かれた要因は何であろうか。ちょうど、二つの外郭線の立地は神足の台地上から南へ低く傾斜している箇所にあたる。つまり台地上から俯瞰されることを恐れ、より高い土塁と堀の外郭線を二重で築くことによって、城域を守ろうとしたものと思われる。寛永10年（1633）7月に勝龍寺「古城」が幕府から放棄される要因になったのが、本丸部分が低地で、水害に弱い点であった。[12] 従来から低地であった立地でありながら、勝龍寺城が守護所、拠点的城郭として維持されてきた理由を、今後考える必要があるが、藤孝時代は、その弱点を克服する具体的施策が求められたものと思われる。A、Bの二重の外郭線は、西側へ向かうほど、構造が明確ではないが、大正11年の都市計画基本図ではBの方も折れを伴う箇所が見られたと思



第44図　神足村微細絵図（部分　左が北）

われる。なお、後述する宝暦 12 年（1762）の神足村微細絵図（長谷川氏所蔵）にも二重の竹藪の表現が描写されている。なかには、南北方向の竹藪もみられ、前述したような仕切りの土塁であったと思われる。

外郭線の構築は、前述した山科本願寺跡、高屋城跡、伊丹城跡などでも見られるが、山科以外は台地の外縁を活用した土塁・堀であった。これに対して勝龍寺城の外郭線Ａ、Ｂは、台地の高低差を遮断するようにほぼ直線上に構築されている。土木加工度の高さがうかがえる。

３　勝龍寺城主要部

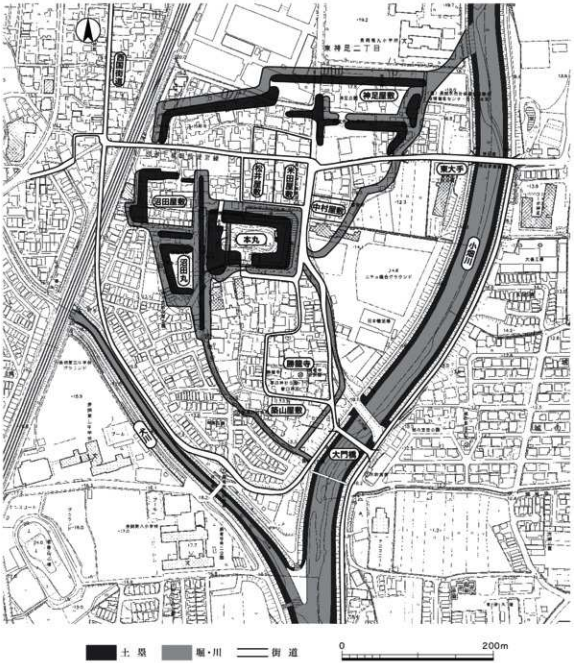
最後に勝龍寺城の主郭（本丸）を中心とした主要部について考察したい。

主郭部分は 1988 ～ 1989 年に発掘調査が行なわれ、藤孝時代の遺物が出土している。白磁、染付などの貿易陶磁、瀬戸・美濃の天目茶碗、備前の擂鉢、さらに坂本城跡、小丸城跡出土と同笵軒丸瓦などが確認され、乙訓の他の中世城館跡とは相違する遺物出土状況である。[13] また、遺構としても、北東隅に石垣と石段が検出され、櫓の存在が推定されている。また北西隅には石垣で土塁を切り取った枡形状の虎口が確認されている。石垣には転用石材が使われ、多くの一石五輪塔が検出されている。主郭の内部には、城内平坦地を区切る南北方向の堀が走り、主郭を東西に仕切っている。この堀は前述した枡形状の虎口と絡み合って、２折れの虎口を形成している。[14] 勝龍寺城が織豊系城郭として語られる場合、この虎口が象徴的に取り上げられている。

ただし、勝龍寺城跡は織豊系城郭としては、そぐわない側面も見られる。たとえば、主郭の西に隣接する通称沼田丸も主郭を取り巻く主要部の一部であり、両者はともに大字勝龍寺城にあたる。しかし、両者の間には主郭の西辺土塁があり、虎口や通路で接続されていない。この西辺土塁の高さは５m であり、四方の土塁のなかでもっとも規模が大きい。つまり隣接する沼田丸と区切るために土塁をあえて高くしている。したがって、前述した北西隅の枡形状虎口をいったん外に出て別な空間（曲輪）に出た後、沼田丸へ入るという構造になっている。つまり、主郭と沼田丸の関係は、主従関係というより個々が比較的独立性の強い関係であった。一般に織豊系城郭は求心的な構造を指向するが、勝龍寺城主要部は、その傾向が希薄である。

なお、当城には天主があったと言われているが（『東山御文庫記録』）、それが最高所である主郭西辺の土塁上なのか、あるいは石段のある北東隅かは明確ではない。ただ、土塁の規模に差異があることは注目しておきたい。

では、前述の明確になっている北西隅の枡形状の虎口をいったん外に出た後、どうなるのだろうか。残念ながら、勝龍寺城主郭の北側は大字神足の住宅地となっており、明確な構造はつかめない。ただ、前述した宝暦 12 年の古地図によれば、西側に横矢掛りの突出部が看取できる。外周には堀も見られ、ブロック状の地割が確認できる。また、前述した主郭北西隅の枡形状虎口の接続する北部にも、逆Ｌ字形の畑地があり、徳勝寺境内との間に、やはりブロック状地割が看取できよう。つまり、勝龍寺城跡は、主郭も含めて、ブロック状の地割が並立するタイプということになる。織豊系のプランは、こうした並立した構造に主従関係を明確にするために、前述した



第 45 図　勝龍寺城の鋼張り想定復原図（1/5000）

枡形状虎口などを効果的に配置していくが、この勝龍寺城の場合、逆に土塁の高低差を設けて、並立度合を強めている。こうした点を想起すると、個々の虎口は発達するものの、全体構造を大きく変化するまでには至らなかったのが、勝龍寺城の特徴といえるだろう。

次に課題となるのが、こうしたブロック状地割が成立した要因である。すでに指摘されているように、16 世紀中葉まで勝龍寺は一次史料において「城」の表記がなかった。そのため、勝龍寺は寺院主体の集落であり[65]、ブロック状地割も、こうした寺院、寺坊の分立が起因している可能性がある。なお、同時代の類似した遺構として、朝護孫子寺の山岳寺院を活用した、松永久秀の信貴山城があげられる。一部であるが独立性の高い曲輪を配置した構造となっているが、個々に

虎口を強化する構造になっている。

おわりに

拠点的城郭としての勝龍寺城跡の前身は神足城跡と考えられる。広域散在荘園だった小塩荘の政所屋敷であり、細川京兆家内衆香西元能が入っている。これらは乙訓郡の拠点的城郭としての要素を持ち合わせていたと思われる。しかし、次第に隣接する勝龍寺へ政治的機能は移転したと思われる。その後、細川藤孝の時代に改修と拡張を遂げたが、主要部の改修は、土塁の規模、枡形状虎口、櫓台などに限定され、曲輪が分立・並立している全体的な構造の改変はなされていない。また、こうした主要部とは別に、台地から見下ろされる斜面を克服するために、二重の外郭線を築造した。これによって主要部曲輪の並立した状態が解消されないまま、外縁部を補強する構造となったと思われる。

16 世紀前半に基本プランが成立していた山科本願寺、高屋城についても、求心的な構造を指向していた。その点を勘案すれば、勝龍寺城は、根本的な改変のないまま、外郭線を追加で拡張していくパターンである。したがって、こうした戦国期の様相と織豊系が並立していた点に当城の平面構造上の特徴があるといえる。

注１）『守護所・戦国期城下町を考える』守護所シンポジウム⁂岐阜研究会　2004
２）中井　均「『公的城郭』としての勝龍寺城」「勝龍寺城の改修」『長岡京市史』本文編一　1996
３）岩崎　誠「勝龍寺城発掘調査報告」「長岡京市センター報告書」第６集　1991
４）土山公仁「信長系城郭における瓦の採用についての予察」『岐阜市歴史博物館研究紀要』４　1990
５）千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会　2000
６）百瀬ちどり「九条政基の『小塩荘下向引付』を読む」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　1992
７）拙稿「中世方形館研究の問題点」『城館史料学』４　2006
８）服部英雄「山城国乙訓郡（小塩庄）条里図による小地名変遷の検討」同『景観にさぐる中世』新人物往来社　1995
９）『日本荘園絵図集成』下　東京堂出版 1977（佐々木虔一氏執筆）
10）中塚　良「付載　京都盆地西縁・小畑川扇状地の微地形分析」『京都府センター概報』第 47 冊　1992 年
11）原　秀樹「右京第 399 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度　1991
12）福島克彦・原秀樹「神足館について」『近世城郭から考える諸問題』2016
13）前掲（３）
14）前掲（５）
15）仁木　宏「戦国時代　村と町のかたち」山川出版社　2004

あとがき　― 勝龍寺城跡外郭土塁・空堀の発掘調査と整備の経過、今後の活用について ―

勝龍寺城跡の外郭土塁・空堀では、国庫補助事業として平成 11・12・14・25・26 年に合計 5 回にわたる発掘調査を実施した。平成 14 年までの発掘調査は、現存する土塁・空堀の規模や構造などを明らかにする目的で実施され、平成 25 年度以降は神足公園の整備事業に伴い、遺跡の保存と活用を視野に入れた整備に必要な情報を得るために実施されたものである。

現存する堀や土塁は、元亀 2 年（1571）の細川藤孝による勝龍寺城改修時の姿を残したものである。発掘調査によって、調査地西端の東西土塁と南北土塁の取り付き部分は横矢掛かりであること、堀の底から土塁頂部までの比高が 6 m を超える大規模なものであることが明らかとなり、高い防御性を備えていたことがうかがえる。また、勝龍寺城北東部の外郭土塁・空堀はすべてが細川藤孝による改修で構築されたものではなく、それ以前に存在した神足城の土塁や堀を取り込む形で形成されていることも明らかとなった。

こうした発掘調査の成果を踏まえ、平成 25 年に外郭土塁・空堀の公園整備検討会を 2 回開催し、有識者の指導のもと整備計画の検討を重ねた。当時の土塁をイメージできる公園とすることを前提に、本遺構の形状を保存するとともにその特性を生かした設計となるよう努めた。土塁上には遊歩道を設けて土塁の高さ、堀の深さを体感できるようにし、土橋や虎口についても形状が分かり、それらの機能や構造を理解するための説明版を各所に配した。平成 27 年 3 月には整備工事が完了し、現在では勝龍寺城跡とともに多くの見学者が訪れる公園となっている。

勝龍寺城は石垣や枡形虎口、礎石建物など先駆的な築城方法をいち早く取り入れた、市内では唯一の織豊系城郭である。加えて、外郭土塁・空堀は地上に現存する数少ない遺構であり、本市を代表する歴史資源のひとつといえる。また、従来存在した城郭を取り込むことにより、当地が地域の支配拠点として利用され続けたという事例は、日本中世（城郭）史においても重要な意味をもつ。外郭土塁において神足城の堀などが確認されただけでなく、神足神社参道より東側の土塁の下部で古墳が確認されたことは、当地が有する歴史的な重層性を象徴するものといえよう。

今後は、公園整備によって遺構の保存が可能となった勝龍寺城跡を、いかに活用していくかが課題である。毎年秋に実施される長岡京ガラシャ祭は勝竜寺城公園を会場として利用しており、多くの市民が参加している。その中で、講演会や遺物展示を実施して成果を上げているところであるが、本市の歴史の魅力や文化財の価値を周知するにはさらなる活用が必要である。外郭土塁・空堀については、本市の指定文化財とすることも視野に入れた整備・活用が望まれる。また、2020 年には NHK 大河ドラマで明智光秀を主人公とした「麒麟がくる」の放送が決定した。勝龍寺城は明智光秀の娘玉が輿入れした城であり、市民の関心は高まっている。これを好機と捉え、地域住民とともに歴史や文化財を活かしたまちづくりに取り組んでいきたい。

最後に、勝龍寺城跡外郭土塁・空堀の保存整備にあたり、発掘調査および整備検討会でご指導頂いた大阪大学名誉教授村田修三氏、大阪市立大学教授仁木宏氏、滋賀県立大学教授中井均氏、発掘調査においてご理解とご協力を頂いた土地所有者、地元自治会、近隣住民、神足神社の皆様には、末筆ではありますが記して感謝申し上げます。

付表－2　報告書抄録

ふ り が な	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	長岡京市文化財調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第73冊
編 著 者 名	原　秀樹、木村泰彦、岩崎　誠
編 集 機 関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒617-0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡	長岡京市 東神足二丁目 地内	26209	107 93 84-1 82	34°54′59″	135°42′17″	1999年 ～ 2002年 ・ 2013年 ・ 2014年	合計 306㎡	遺跡確認 調査 ・ 保存整備 事業

遺　跡　名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡	都　城	長岡京期		土師器、須恵器	
神足遺跡	集落跡	弥生時代 平安時代 鎌倉時代	井戸、溝、土坑	弥生土器、土師器 須恵器、瓦器、陶磁器 瓦、石器	
中世勝龍寺城跡	城　跡	室町時代 桃山時代	土塁、空堀、溝	土師器、瓦器、陶磁器 瓦、金属製品	土塁・空堀の改修と出土遺物の年代観
神足城跡	城　跡	室町時代	堀	土師器、瓦器、陶磁器	神足城に関連する新たな発見

※ 緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

図　　版

（1）恵解山古墳と勝竜寺城公園・神足神社遠景（北東から）

（2）勝竜寺城公園と外郭土塁が残る木立（南から）（平成 10 年撮影）

長岡京跡右京第 631 次調査

（1）東西土塁と南北に延びる堀 SD01（南東から）

（2）東西空堀の掘削状況（北東から）

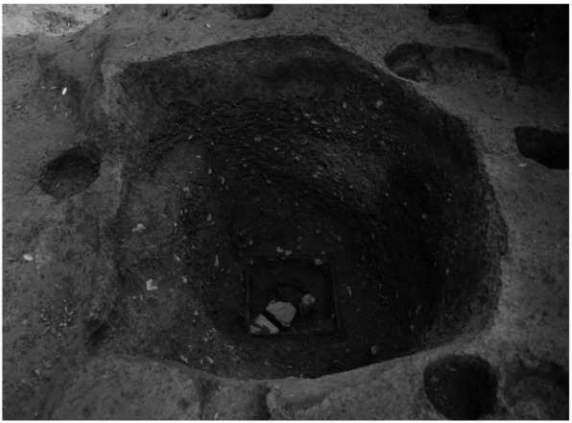
（3）東西空堀の掘削状況（北西から）

（1）東西土塁の断ち割りと調査地遠景（南東から）

（2）東西土塁南側に堆積する石礫（南東から）

長岡京跡右京第 681 次調査

（1）東西土塁南側の下層遺構（西から）



（2）室町時代の井戸 SE05（西から）

（1）南北土塁西側の北トレンチ（南西から）

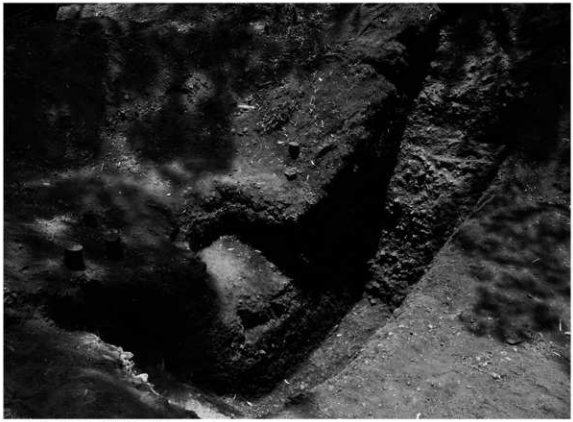
（2）南北土塁西側の南トレンチ（南西から）

（3）南北土塁に平行する溝 SD01 断面（北から）

長岡京跡右京第 1060 次調査

（1）東西空堀と南北土塁（東から）

（2）土橋と東西空堀の堆積層（南から）



（1）東西空堀の横断面（北西から）

（2）東西土塁の西向き斜面（西から）

（1）東西土塁南側の平坦地（南西から）

（2）東西土塁に平行する溝 SD04 を覆う砂礫（北西から）

東西土塁に平行する溝 SD03（南から）

立会第 14124 次調査

（1）伐採後の東西土塁と南北土塁（東から）

（2）整備工事中の土塁崖面（南東から）

169

3

164

4

44

5

119

185

123

186

120

194

136

9

133

12

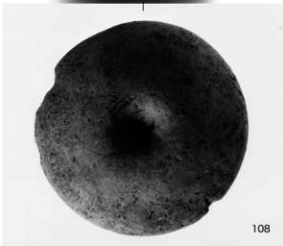
132

13

土師器

出土遺物

125



108

254 256

242

255

331

334

273

274

299

276

258

290

287

285

267

瓦器・国産陶磁器・白磁

長岡京市文化財調査報告書 第 73 冊

平成 31（2019）年 3 月 26 日　発行

編　　集　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒 617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
電話　075－955－3622　　FAX　075－951－0427

発　　行　長岡京市教育委員会
〒 617－0851　京都府長岡京市開田一丁目 1－1
電話　075－951－2121（代）

印　　刷　山代印刷株式会社
〒 602－0062　京都府京都市上京区寺之内町通小川西入
宝鏡院東町 588 番地
電話　075－441－8177　　FAX　075－441－8179